



KASA

Kyushu
Architecture Student
Supporters for
Environmental
Improvement Project

KASEIプロジェクト年次報告2016

Annual Report 2016

KASEIプロジェクト実行委員会



02	KASEI実行委員長挨拶	14	活動事例01: 甲佐町白旗・乙女	42	論考01: ネットワーク型活動体としての KASEIの試み
03	KASEI学生代表挨拶	17	活動事例02: 益城町飯野小	44	論考02: 仮設団地が生きられる時間
04	熊本地震の概要・現状	18	活動事例03: 西原村小森	46	論考03: 仮設団地住民が 主体的に取り組む環境整備
06	KASEIプロジェクトとは	22	活動事例04: 益城町木山 宇土市境目第2・3	48	論考04: 復興支援活動の多様性と その実践
08	KASEIロゴマーク	24	活動事例05: 大津町室・南出口 南阿蘇村陽ノ丘	50	年間スケジュール
10	KASEI活動拠点マップ	28	活動事例06: 御船町東小坂	51	メディアスクラップ
12	KASEI活動一覧	30	活動事例07: 益城町テクノ	52	寄付賛同願い
		34	活動事例08: 宇土市境目 宇城市当尾	53	活動助成・賛助会員
		36	活動事例09: 熊本市城南町さんさん2丁目 阿蘇市内牧	54	メンバー 一覧
		38	活動事例10: 益城町小池島田	56	編集後記
		40	活動事例11: 美里町くすのき平 御船町玉虫・甘木		

実行委員長挨拶

Introduction of Executive chairman

末廣 香織 Kaoru SUEHIRO

九州大学 人間環境学研究院 都市建築学部門 准教授

KASEI(九州建築学生仮設住宅環境改善)プロジェクトは、2016年4月に発生した熊本地震被災者のための仮設住宅の環境改善を目的とした、学生中心の活動である。熊本県はこれまでの各被災地での経験を生かし、地震発生直後から従前より環境の良い仮設住宅や集会所としての「みんなの家」の建設を進めた。こうした仮設住宅地の整備公的資金が使われているが、住宅以外の外構やみんなの家の家具といった環境整備は、そこには含まれない。KASEIは建築学生の「ものづくり」の能力を生かしながら、住民の方々と共同で環境改善に取り組むことで、「ことづくり」も同時に行い、不安を抱える居住者にとって少しでも心安らぐコミュニティを構築することを目指している。

KASEIの構想を立ち上げたのは、仮設住宅の建設が始まった5月だった。九州内の先生方に呼びかけてメンバーを募ったが、当初は熊本の大学が被災していて、とても活動ができる状態ではなかったため、福岡の有志を中心に進めることにした。そして、7月12日に名誉顧問の伊東豊雄さんを招いて第1回実行委員会を開催し、本格的に活動を開始した。本記録は、そこから2017年3月末までの活動の記録である。KASEI活動は、現在約60名の教員と約80名の学生が実行委員として活動し、活動に関わった学生数は250名を超える。2016年度の記録が残るだけで計35団地で延べ74回の活動を行ってきた。この3月末には卒業する学生から新たなメンバーに引き継ぎが行われ、気持ちも新たに2期目のKASEI活動が始まっている。

KASEI活動は、日本財団を始めとする多くの支援者から寄付や賛助会費をいただいている。また他にも多くの方々に協力いただきながら活動を進めてきた。最初に被災地支援に関する情報をいただいた大月敏雄さん、岩佐明彦さん、ロゴマークやビブスをデザインいただいた野老朝雄さん、三星安澄さん、ランドスケープの山崎誠子さん、写真家の針金洋介さん、ホームページ作成に尽力いただいた中大窪千晶さん、本記録のデザインを担当いただいた中野豪雄さん、木材供給の窓口となった肥後木材さん、そして各仮設団地で活動にご協力いただいた住民の方々、各自治体職員の方々、最後に活動全般を表に裏に支えていただいた「くまもとアートポリス」班を始めとする熊本県職員の方々等々、数え上げればきりが無い。思えばあつという間の1年だった。被災地も今ではすっかり日常を取り戻した印象があるが、まだまだ多くの方々が不安を抱えながら仮設で生活しており、今後が見通せているわけでもない。この場をお借りして、活動を支えていただいた全ての方々に感謝の意を表すとともに、引き続きKASEIへのご協力をお願いしたい。

学生代表挨拶

Introduction of representative student

遠藤 由貴 Yuki ENDO

2017年度学生代表

九州大学大学院 人間環境学府 空間システム専攻 修士課程

2016年4月、史上初めて震度7を2回記録した熊本地震は多くの方々に被害をもたらしました。地震発生時にわたしは福岡にいましたが、揺れの大きさにかなりの恐怖を覚えました。ましてや当時、熊本にいた方々が受けたショックは計り知れません。現地への訪問やメディアを通して目の当たりにした熊本の被災した様子は衝撃的なものでした。同じ九州に住む人間として何かしなければならぬと思い、私はKASEIに参加しました。

KASEIには、わたしと同じような思いを持った、主に九州・山口の建築系学生と教員が集まり、大学・研究室ごとに担当する仮設団地を持って支援活動を行っています。一口に仮設団地と言っても、規模や暮らしている住民の方が異なれば、抱えている状況や求められているサポートも異なります。それに対して私たちは、試行錯誤を繰り返しながら活動を行ってきました。活動を通して初めて経験することも多く、学生としても多くを学ぶ貴重な機会にもなっています。

震災から約1年が経ち、住民の方の生活には少し落ち着きが見えてきたように思われます。仮設団地に入居した直後は殺風景な光景が広がっていましたが、今では花壇には花が咲き、住民の方同士、笑顔でお話をされている様子も見受けられるようになりました。活動は仮設団地の住民の方とコミュニケーションをとりながら行われましたが、活動を重ねるごとに住民の方と顔なじみになり、気づいたら支援に訪れている私たちが元気づけられていることもしばしばです。ここに記録されているKASEIの活動によって仮設住宅での生活の不便が全て解消されたとは全く思っておりませんが、少しでもお手伝いになればと願うばかりです。しかし、生活再建に向けた道のりはこれから長いです。被災者の方が必要としている支援は復興のフェーズごとに変化していきます。それらに対して継続して活動を行っていくことが、重要であると思います。

近い将来には、また大きな地震が日本を襲うことが予想されています。この活動の記録が、将来に起こるかもしれない災害の時に少しでも役に立つものになれば幸いです。

熊本地震概要・現状

Outline and present situation of Kumamoto earthquake

2016年4月14日夜、益城町で震度7、隣接市町村で震度6弱の激しい揺れを観測する大きな地震が熊本を襲った。さらに16日未明に発生した、より大きな地震では、益城町、西原村で震度7、熊本県の広い範囲で震度6強が観測された。これらの地震は、のちに前震・本震と呼ばれることとなったが、その後半年間で4000回を越える一連の揺れ^{*1}とともに、熊本に甚大な被害をもたらし、1年経つ今日においても、未だ癒えぬ傷跡を各地に残している(写真1)

この大地震により、熊本県下で災害関連死を含めて222名の方が亡くなり、42,322棟にのぼる住宅が半壊以上の被害を受けた^{*2}。また、公に把握されているだけでも11万を越す人々が一時的な避難所生活を送ることとなった。これを受けて、熊本県では、住家を失った人々の復興までの一時的な住まいとして、災害救助法による110団地4,303戸の「応急仮設住宅(建設型仮設住宅)」と、15,000戸の「みなし仮設住宅(借上型仮設住宅)」が提供されている^{*3}。当初、仮設とみなし仮設を合わせて4,200戸程度と公算された^{*4}のに比べると、約4倍の量が供給されることとなった訳である。

ここで熊本の仮設住宅に注目すると、東日本大震災のものは雰囲気異なる仮設団地が建設されていることに気づく(写真2)。これは「熊本型デフォルト」と呼ばれる独自の仮設住宅計画が採用された為で、東日本に比べ、住宅としての性能向上や、ゆとりのある住戸配置、共用空間の充実などが図られている^{*5}。また、熊本県では、2012年7月の九州北部豪雨(熊本広域大水害)において、阿蘇市に木造の応急仮設住宅を供給した際、その建設にあたった熊本県優良住宅協会と防災協定を結んでおり、今回の熊本地震においても、木造の応急仮設住宅が早期に建設されている。この阿蘇市の木造仮設は、仮設住宅としての利用を終えた現在も、木杭の

野口雄太 Yuta NOGUCHI

九州大学大学院 人間環境学府 都市共生デザイン専攻 博士後期課程

基礎をRC造の基礎へと改修し、恒久住宅として利用され続けている。今回の木造仮設住宅もまた、復興公営住宅としての転用を見込んで、RC造基礎の上に建設された。しかし、震災直後の混乱の中で1日も早く完成することが求められた仮設住宅建設の中で民有地の上に作られた木造仮設住宅も多く、その恒久住宅への転用には土地購入などの新たな課題が現れてきている。これは、熊本型デフォルトが示した新たな試みと課題の1つであると考えられる。

また、熊本では災害救助法によって設けられる仮設の集会施設を「みんなの家」として建設している(写真3)。これは、東日本大震災の際に「くまもとアートポリス」の東北支援プロジェクトとして建設された仙台市宮城野区みんなの家をはじめとした一連の「みんなの家」を熊本にも実現しようとしたものである。また、熊本では、集会施設を設ける基準を引き下げ、20戸以上の団地には談話室(40m²)1棟、50戸以上では集会所(60m²)1棟、80戸以上では談話室と集会所各1棟を設置することとし、その上で、標準設計を設けて住戸と同時期に竣工する規格型と、入居後に居住者の意見を取り入れて設計される本格型と呼ぶ2つの方法でみんなの家を建設している。さらに20戸未満の小規模な仮設団地には、寄付金などを財源に建設されるプッシュ型みんなの家という小さな集会所の整備が現在進んでいる。これらのみんなの家もまた、復興後も集会施設として活用することが期待されている。

このように今回の仮設住宅は、まず居住環境としての質の向上が図られると同時に、仮設の枠を超え、復興後の利活用を視野に入れた、新しい試みであった。

仮設住宅の供与期間は、一般に2年間とされているが、2017年6月28日、熊本県は国に対して、仮設の入居期間の

延長を願い出ている^{*6}。熊本地震は被害が甚大な特定非常災害に指定されている為、県知事の判断と国の同意のもとで、供与期間を1年単位で延長することが可能である。被災家屋の再建や復興公営住宅の整備が進められるなかで、供与期間の延長は、より良い復興案を描く為の猶予となり得るのではないだろうか。熊本地震から2年目に入った今年1年間、1日も早い復興もさることながら、恒久的な住環境として質の良い復興を実現していくことも肝要になってくると考えられる。

一方で、仮設団地では、復興が進むにつれて、そこで生活する人の数が減るとともに空き住戸が増えてくる。人手が少なくなれば、団地の自治会活動や、集会施設の管理などに支障が出てきたり、隣に空き住戸が出来れば、例えば冬には暖房の効きが悪くなり、住戸内はさらに冷え込むこととなる。このように入居が始まった初期とは、また異なる問題や課題が立ち現れてくる。仮設の閉鎖に伴う仮設から仮設への引越などは、生活者にとっても団地にとっても環境の変化を引き起こす。

KASEIにとっても、活動開始から2年目になる本年、昨年とは異なる支援を組み立てていく必要がある。

- *1 気象庁報道資料『平成28年(2016年)熊本地震』の震度1以上を観測した地震の回数及び震源等の精査結果について、2016年10月11日発表
- *2 消防庁報道資料『熊本県熊本地方を震源とする地震(第100報)』2017年3月31日発表
- *3 熊本県『応急仮設住宅等の入居状況について(H29.4.30現在)』<https://www.pref.kumamoto.jp/kiji_19798.html>、2017.6.12参照
- *4 熊本日日新聞『仮設住宅1期分着工』2016.4.30付朝刊、(3)。
- *5 桂英昭『熊本型デフォルト- 応急仮設住宅計画』Web版建築討論009号<<http://touron.aij.or.jp/2016/08/2438>>、2017.6.12参照
- *6 熊本日日新聞『県、仮設入居延長を要望』2017.6.29付朝刊、(4)。



写真1 熊本地震により崩落した斜面と流された阿蘇大橋(2017.7.22撮影)



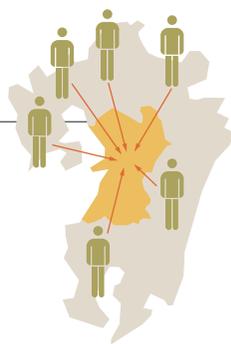
写真2 住棟間に設けられた路地とベンチ・住戸南面には内外を繋ぐ掃出し窓と溝縁



写真3 甲佐町白旗仮設団地に建設された本格型みんなの家

KASEIプロジェクトとは

Concept of KASEI project



KASEIプロジェクト (Kyushu Architecture Student Supporters for Environmental Improvement project) は、熊本地震の被災地に建設された仮設住宅地の環境改善支援を行い、居住者に安らぎのある住環境と、それらの一連の活動を通じて豊かなコミュニティを築くことに「加勢(かせい)すること」を目標として活動しています。

1 | プロジェクトの特徴

- 建築系大学および高専の学生が協力して仮設住宅の住環境改善に取り組む
- 九州・山口の大学を中心に多くの学生・教員が参加
- 仮設住宅の居住者、地元自治体と話し合いを重ねながら継続的に活動する
- みんなで考え、みんなで作り、みんなで支える場を作る

2 | 活動内容

「ものづくり」と「ことづくり」の両面の環境改善支援を同時に実施していきます。

九州・山口の大学の研究室を単位としたチームで、各仮設住宅の支援活動を実施し、居住者と協力しながら活動していきます。活動で得られた経験や情報を整理・共有しながらKASEIプロジェクトに蓄積し、他仮設団地での支援プロジェクトで展開していきます。

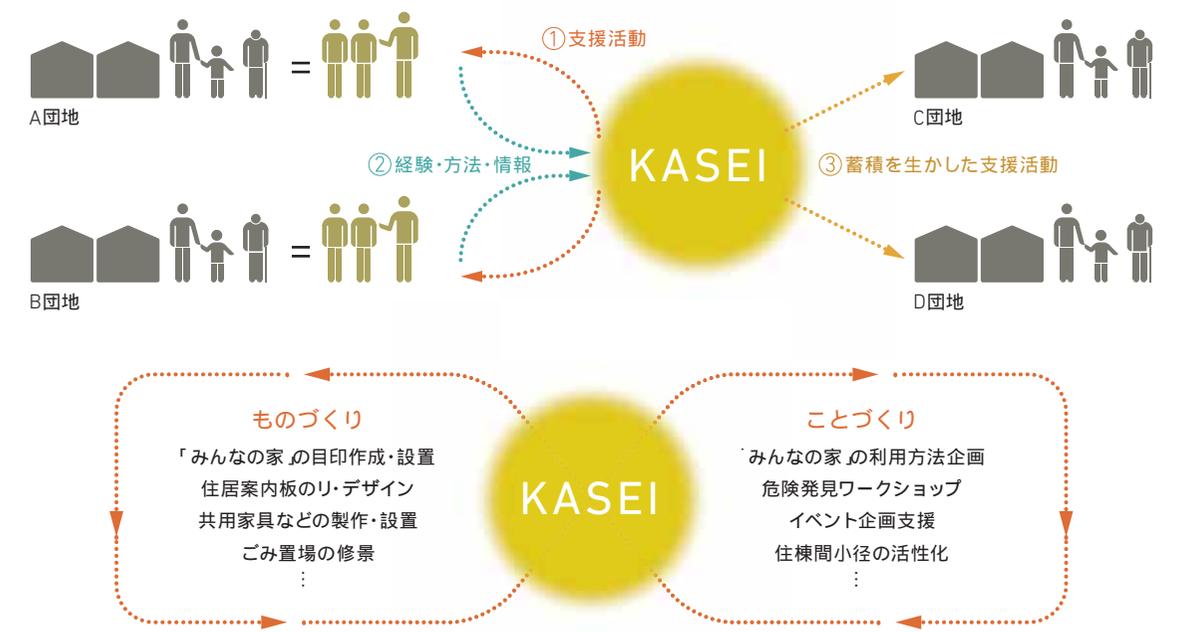
3 | 組織

[役員]

- 末廣 香織 (実行委員長・九州大学 准教授)
- 平瀬 有人 (副委員長・佐賀大学 准教授)
- 田上 健一 (事務局長・九州大学 教授)
- 矢作 昌生 (監事・九州産業大学 准教授)
- 菊地 成朋 (顧問・九州大学 教授)
- 林 孝之 (学生代表・九州大学大学院)
- 伊東 豊雄 (特別顧問・建築家)

4 | 参加大学

- 山口大学・西日本工業大学・九州工業大学・北九州市立大学・九州産業大学・熊本県立大学・九州大学・福岡大学・近畿大学・佐賀大学・長崎大学・大分大学・熊本大学・崇城大学・熊本高等専門学校・第一工業大学・有明工業高等専門学校・鹿児島大学・大阪工業大学・大阪市立大学



KASEI ロゴマーク

KASEI Logo



2020年東京五輪・パラリンピックのエンブレムを手掛けたデザイナー、野老朝雄氏のデザインした「ヒトビット」を用いて、KASEIが活動している団地のロゴマークを各学生が作成しました。

「人」という文字を組み合わせてできるロゴマークですが、いくらかでもバリエーションがつけれます。

組み合わせた中に「輪」が浮かび上がるデザインにもなっています。

人と人がつながり・加勢しあい、群となって新たな形となるこのデザインは、KASEIのコンセプトにも通じるものとなっています。

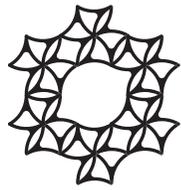


ロゴマークをもとにしたKASEIピブス

各団地のロゴマーク



宇城市当尾



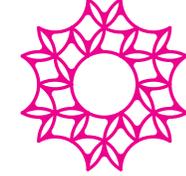
宇土市境目



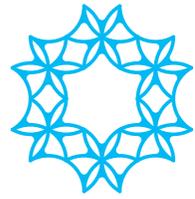
宇土市高柳



大津町室



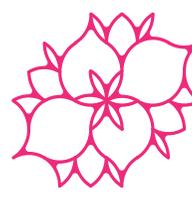
大津町室南出口



西原村小森



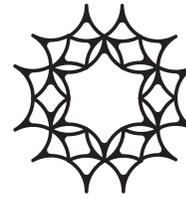
御船町東小坂



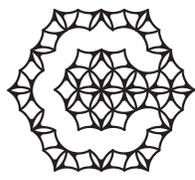
益城町テクノ



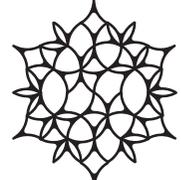
益城町安永



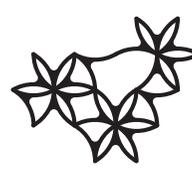
益城町木山



南阿蘇村陽ノ丘



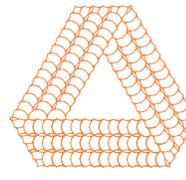
南阿蘇村岩坂



益城町小池島田



益城町惣領



甲佐町白旗

担当した学生のコメント

それぞれのロゴマークは、団地を担当している大学・研究室の学生を中心に作られました。

一つ一つのロゴマークには住民の方の思いや私たちの仮設住宅に対する思いが込められています。

「ヒトビット」に込められた野老さんの思いをお聞きして、大学や研究室の垣根を超えた支援をさらに続けていかなければと、気持ちを新たにしました。

ロゴマーク作成手順

0

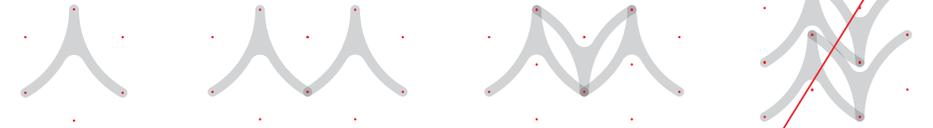
最小単位「ヒトビット」。人という文字がモチーフ。



基本ピース

1

1つの人型のピースの周囲に6つのポイントがグルーピングされている。この6つのポイントに他のポイントをきちんと合わせるように組み合わせる。中心にもポイントがあるが、これは重ねないようにする。



赤丸が周囲の6つの点

*赤丸はわかりやすくするために表示している。

2

パーツの回転は60度、120度、180度、240度、300度とする。

30度や90度など、その他の角度はNG。

またパーツの線の部分が多く重ね合さるようなものも避ける。



0度

60度

120度

180度

240度

300度



30度

90度

その他の角度

線が多く重ねあっている例

3

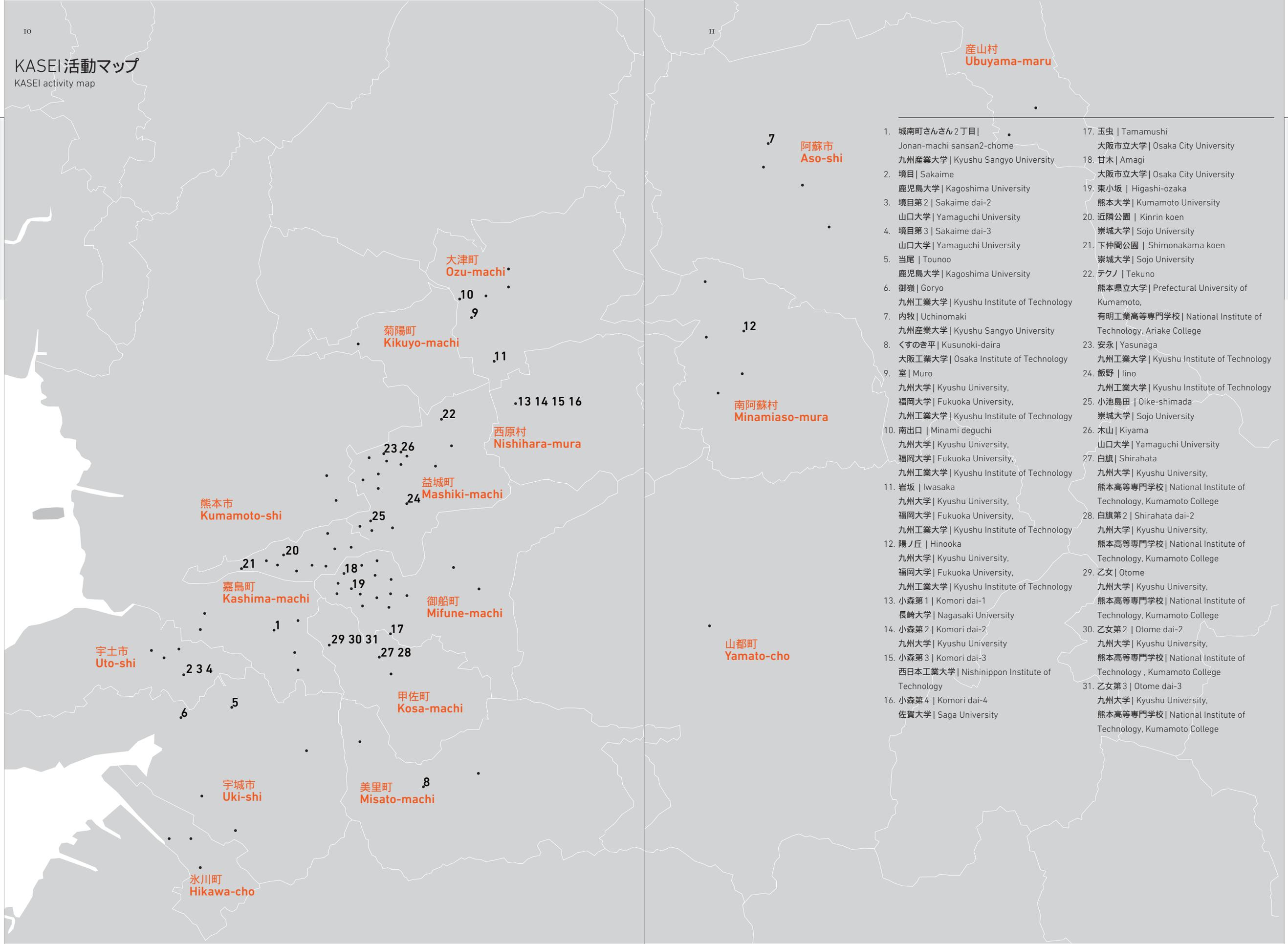
パーツの縦横のプロポーションをゆがめたり、枠線などでの表現はしない。



以上を考慮してあとは自由に作成してみてください。

KASEI活動マップ

KASEI activity map



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 城南町さんさん2丁目 Jonan-machi sansan2-chome 2. 境目 Sakaiame 3. 境目第2 Sakaiame dai-2 4. 境目第3 Sakaiame dai-3 5. 当尾 Tounoo 6. 御嶺 Goryo 7. 内牧 Uchinomaki 8. くすのき平 Kusunoki-daira 9. 室 Muro 10. 南出口 Minami deguchi 11. 岩坂 Iwasaka 12. 陽ノ丘 Hinooka 13. 小森第1 Komori dai-1 14. 小森第2 Komori dai-2 15. 小森第3 Komori dai-3 16. 小森第4 Komori dai-4 | <ol style="list-style-type: none"> 17. 玉虫 Tamamushi 18. 甘木 Amagi 19. 東小坂 Higashi-ozaka 20. 近隣公園 Kinrin koen 21. 下仲間公園 Shimonakama koen 22. テクノ Tekuno 23. 安永 Yasunaga 24. 飯野 Iino 25. 小池島田 Oike-shimada 26. 木山 Kiyama 27. 白旗 Shirahata 28. 白旗第2 Shirahata dai-2 29. 乙女 Otome 30. 乙女第2 Otome dai-2 31. 乙女第3 Otome dai-3 |
|---|---|

産山村
Ubuyama-maru

阿蘇市
Aso-shi

南阿蘇村
Minamiaso-mura

山都町
Yamato-cho

大津町
Ozu-machi

菊陽町
Kikuyo-machi

西原村
Nishihara-mura

益城町
Mashiki-machi

熊本市
Kumamoto-shi

嘉島町
Kashima-machi

御船町
Mifune-machi

宇土市
Uto-shi

甲佐町
Kosa-machi

宇城市
Uki-shi

美里町
Misato-machi

氷川町
Hikawa-cho

KASEI活動一覧

KASEI activities list

- ・ **2016.07.23**
 - 甲佐町白旗団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.08.03**
 - 西原村小森第2団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 九州大学菊地研
- ・ **2016.08.03**
 - 西原村小森第3団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 西日本工業大学岡田研・三笠研
- ・ **2016.08.03**
 - 西原村小森第4団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 佐賀大学平瀬研
- ・ **2016.08.06**
 - 阿蘇市三久保団地・内牧団地・東池尻団地
 - グリーンカーテン設置ワークショップ
 - 九州大学未廣研・熊本大学田中研
- ・ **2016.08.07**
 - 宇城市当尾団地
 - ゴーヤカーテンの設置
 - 鹿児島大学
- ・ **2016.08.09**
 - 益城町安永団地
 - 自治会の設置などに関する説明会
 - 九州工業大学佐久間研
- ・ **2016.08.09**
 - 大津町室団地・南阿蘇村長陽運動公園
 - 大津・南阿蘇の仮設団地の現状調査
 - 九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.08.10**
 - 大津町室南出口団地・大津町岩坂団地・菊陽町光の森団地
 - 大津・菊陽・南阿蘇の仮設住宅調査
 - 九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.08.10**
 - 益城町飯野小団地・馬水団地
 - 益城町安永団地自治会の設置などに関する説明会
 - 九州工業大学佐久間研
- ・ **2016.08.10**
 - 甲佐町白旗団地
 - みんなの家*設計報告・そうめん流し
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.08.10**
 - 西原村小森第2団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 九州大学菊地研
- ・ **2016.08.10**
 - 西原村小森第3団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 西日本工業大学岡田研・三笠研
- ・ **2016.08.10**
 - 西原村小森第4団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 山口大学内田研
- ・ **2016.09.10**
 - 甲佐町白旗団地
 - 棟上げお祝い会
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.09.10**
 - 益城町木山団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 山口大学内田研・九州産業大学矢作研
- ・ **2016.09.19**
 - 益城町小池島田団地
 - 第1回「*みんなの家*」ワークショップ
 - 崇城大学西郷研・秋元研
- ・ **2016.09.24**
 - 甲佐町白旗団地
 - みんなの家*完成式
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.09.27**
 - 南阿蘇村役場長陽庁舎
 - 打ち合わせ
 - 九州大学田上研・朝廣研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.09.30**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.10.01**
 - 大津町室団地
 - 意見交換会
 - 九州工業大学徳田研・九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.10.01**
 - 大津町室南出口団地
 - 意見交換会
 - 九州工業大学徳田研・九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.10.05**
 - 益城町小池島田団地
 - 第2回「*みんなの家*」ワークショップ
 - 崇城大学西郷研・秋元研
- ・ **2016.10.07**
 - 宇土市境目団地・高柳団地
 - 意見交換会
 - 鹿児島大学鯨坂研・柴田研
- ・ **2016.10.08 - 09**
 - 甲佐町白旗団地
 - みんなの家*用テーブル作成
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.10.11**
 - 益城町テクノ団地
 - みんなの家*最終プラン打ち合わせ
 - 熊本県立大学佐藤研
- ・ **2016.10.13**
 - 西原村小森団地
 - 行政との意見交換会
 - 長崎大学安武研・九州大学菊地研・佐賀大学平瀬研・
 - 西日本工業大学岡田研・三笠研
- ・ **2016.10.13 - 15**
 - 甲佐町白旗団地
 - みんなの家*前広場の花壇作り
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.10.13 - 15**
 - 甲佐町白旗団地
 - みんなの家*用テーブル作成
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.10.16**
 - 甲佐町白旗団地
 - みんなの家*完成式
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.10.25**
 - 熊本県総合福祉センター
 - 火の国会議
 - 熊本大学田中研
- ・ **2016.10.25**
 - 宇城市当尾団地
 - お茶会
 - 鹿児島大学鯨坂研・柴田研
- ・ **2016.10.26**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 九州大学田上研・九州工業大学徳田研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.10.30**
 - 南阿蘇村
 - 組手什ワークショップ
 - 九州工業大学徳田研・九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.10.30**
 - 西原村小森団地
 - みんなの家*合同上棟式
 - 長崎大学安武研・九州大学菊地研・佐賀大学平瀬研・後藤研・
 - 西日本工業大学岡田研・三笠研

- ・ **2016.10.30**
 - 益城町テクノ団地
 - ペーパークラフトWS
 - 熊本県立大学佐藤研・有明工業高等専門学校藤原研
- ・ **2016.11.13**
 - 甲佐町白旗団地
 - 家具WS
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.11.13**
 - 宇土市高柳団地
 - 意見交換会
 - 鹿児島大学柴田研・第一工業大学根本研究室
- ・ **2016.11.19**
 - 益城町小池島田団地
 - 家具WS「*みんなの家*」上棟式
 - 崇城大学西郷研・
 - 秋元研・中園研
- ・ **2016.11.20**
 - 大津町室団地
 - 組手什WS
 - 九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.11.22**
 - 宇土市当尾団地
 - 意見交換会
 - 鹿児島大学鷹野研
- ・ **2016.12.03**
 - 益城町テクノ団地
 - みんなの家*完成式
 - 熊本県立大学佐藤研・有明工業高等専門学校藤原研
- ・ **2016.12.03**
 - 益城町木山団地
 - みんなの家*完成式
 - 山口大学内田研・九州産業大学矢作研
- ・ **2016.12.04**
 - 西原村小森第4団地
 - みんなの家*広場作りWS
 - 佐賀大学平瀬研
- ・ **2016.12.04**
 - 西原村小森第3団地
 - みんなの家*広場作りWS
 - 西日本工業大学岡田研
- ・ **2016.12.04**
 - 西原村小森第2団地
 - 広場作りWS
 - 九州大学菊地研
- ・ **2016.12.09**
 - 大津町室南出口団地
 - 園芸セラピー
 - 九州工業大学徳田研・九州大学朝廣研

- ・ **2016.12.10**
 - 西原村小森第4団地
 - みんなの家*完成式
 - 佐賀大学平瀬研・後藤研
- ・ **2016.12.10**
 - 西原村小森第3団地
 - みんなの家*完成式
 - 西日本工業大学岡田研・三笠研
- ・ **2016.12.10**
 - 西原村小森第2団地
 - みんなの家*完成式
 - 九州大学菊地研究室
- ・ **2016.12.10 - 11**
 - 益城町安永団地・飯野小団地
 - 現況調査・自治会意見交換
 - 九州工業大学佐久間研
- ・ **2016.12.11**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - みんなの家*完成式作戦会議
 - 九州大学田上研究室
- ・ **2016.12.17**
 - 益城町テクノ団地
 - 芝桜植樹WS・カーテン染色WS
 - 熊本県立大学佐藤研・有明工業高等専門学校藤原研
- ・ **2016.12.17**
 - 乙女第2・3団地
 - 視察・聞き取り
 - 九州大学未廣研
- ・ **2016.12.18**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - みんなの家*完成式
 - 九州大学田上研
- ・ **2016.12.18**
 - 大津町室南出口団地
 - 餅つきイベント
 - 九州工業大学徳田研・九州大学朝廣研
- ・ **2016.12.18**
 - 御船町東小坂団地
 - コミュニティスペース完成式
 - 熊本大学田中研
- ・ **2016.12.18**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - みんなの家*完成式
 - 九州工業大学徳田研・九州大学田上研・福岡大学四ヶ所研・宮崎研
- ・ **2016.12.23**
 - 益城町小池島田団地
 - みんなの家*完成式
 - 崇城大学秋元研・西郷研・中園研
- ・ **2017.12.26**
 - 嘉島町上仲間団地
 - 門松・靴箱・しめ縄作り
 - 崇城大学

- ・ **2017.01.06**
 - 益城町小池島田団地
 - みんなの家*前の木のイルミネーション撤去
 - 崇城大学西郷研
- ・ **2017.01.07 - 08**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - だご汁イベント準備
 - 福岡大学四ヶ所研・宮崎研・九州工業大学徳田研
- ・ **2017.01.14**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - だご汁イベント前日準備
 - 福岡大学四ヶ所研・宮崎研・九州工業大学徳田研
- ・ **2017.01.15**
 - 南阿蘇村陽ノ丘団地
 - だご汁イベント
 - 福岡大学四ヶ所研・宮崎研・九州工業大学徳田研・九州大学田上研
- ・ **2017.02.18**
 - 益城町小池島田団地
 - 靴だなの作成
 - 崇城大学秋元研・西郷研
- ・ **2017.02.23**
 - 甲佐町白旗・乙女第3団地
 - 雑誌取材・自治会長との話し合い
 - 九大未廣研
- ・ **2017.02.25**
 - 益城町テクノ団地
 - 組手什家具作りワークショップ
 - 有明工業高等専門学校藤原研・熊本県立大学
- ・ **2017.02.28**
 - 熊本市城南町さきさん2丁目団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 九州産業大学矢作研
- ・ **2017.03.02**
 - 阿蘇市内牧団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 九州産業大学矢作研
- ・ **2017.03.14**
 - 甲佐町乙女第3団地
 - ごみ捨て場修繕WS
 - 九州大学未廣研
- ・ **2017.03.16**
 - 益城町飯野小団地
 - みんなの家*居場所提案の打ち合わせ
 - 九州工業大学佐久間研
- ・ **2017.03.30**
 - 宇土市境目第2・3団地
 - みんなの家*意見交換会
 - 山口大学内田研

・ 活動日

活動団地

活動内容

大学研究室

甲佐町白旗・白旗第2・白旗第3団地

Kosa-machi Shirahata, Shirahata dai-2, Shirohata dai-3

私たちは、入居から約1か月が過ぎた7月13日に実施された住民の方々と本格型みんなの家設計者との意見交換会から活動をはじめました。白旗団地は、県内で最も早く竣工した仮設団地だったため手探りの状況での支援活動開始となりました。意見交換ではみんなの家の設計に関するだけでなく、仮設住宅での生活の大変さや不満などいろいろな話を聞きました。

3回目の意見交換会では住民の方からのイベントの要望に応じて、意見交換会後にそうめん流しを実施しました。これは団地では初めてのイベントで、このときに今後の活動に協力してくれそうな住民の方と知り合いました。その後の上棟式の際に行った餅つきイベントではその方と電話で連絡を取り合いながら、準備の段階から関わってもらうことができ、スムーズに準備を進めることができました。住民の中で活動に協力的な方と知り合うことができたことはKASEIが活動を進めるにあたってはとても重要な出来事だと思っています。

一方で建設が進むみんなの家設計者から、みんなの家前の広場と道路の境界に花壇を、またみんなの家で使う2脚の机を製作してほしいという要請がありました。

まず、私たちは、花壇作りの相談会を実施し、どういった花壇を作るか検討しました。私たちは花壇作りに関する知識はほとんどなく、相談会では住民の方々に教えてもらうことばかりでした。

また偶然居合わせた町長から花壇用のコンクリート資材提供の話もあり、相談会の前に私たちが想定していたものよりずっとすばらしい花壇を住民の方々と設計していくことができました。しかし、いざ実際に作るとなるとなかなか作業は進まずみんなの家の完成式に間に合うかが怪しくなってきました。



第2回みんなの家意見交換会



第3回みんなの家意見交換会後のそうめん流し



みんなの会上棟式と餅つき

[Column] 学生の声

加勢を目的に活動してきたが、実際には住民の皆様に加勢していただくばかりでした。そんな皆様への感謝の気持ちを忘れずに、住民の方々の豊かな生活の一助となれるよう今後とも継続して活動していきたいです。

九州大学 趙研 M1 : 吉岡 大貴

[Column] 学生の声

他大学の学生と共同して様々な加勢を行うことの意義とその大変さを様々な場面で感じています。これからも住民の方々の生活改善の一助となるように頑張っていきたいです。

九州大学 末廣研 M1 : 谷口 和宏

それを見かねた住民の方々が手伝ってくださり、それからは住民の方指揮のもと作業が進んでいき、私たちは助けてもらうことばかりでした。

テーブル作成では完成式に間に合わせる必要があったため、KASEIは連日団地に通り、現地で朝から日が暮れるまで作業をしました。

作業中、住民の方が現場へ差し入れを持って来てくださることがたびたびありました。

このみんなの家完成式前の連日の花壇作り、机作りによって、今までのイベントに参加していない住民の方にもKASEIの存在を知ってもらうことができ、さらには、花壇作り、机作りなどの「ものづくり」の場は手伝ってくださる住民同士のコミュニケーションが生まれる場にもなっているようでした。

そしてついに完成式を迎え、私たちは当日の会場の設営と進行、完成式前の花植え会を行いました。

花植え会では住民の方々が張り切って苗や種を植えてくれました。完成式では県警の音楽隊の素晴らしい演奏もあり、後の内覧会・完成祭では屋台の食べ物・お酒を頂きつつ老若男女、みんなの家を堪能していました。特に小さい子供たちは今までなかった遊び場ができてとても楽しんでいるようでした。

完成式後、団地の様子を見にいくと、住民の方々が花壇作成の際に余った花の苗を自主的にみんなの家の周りに植えていました。また12月には住民の方々が子供も交えてクリスマス会を開いており、KASEIの「ものづくり」が団地のコミュニティを作っていくことにわずかながらも力になっているのではないかと思います。

[Column] 学生の声

1年間のKASEIの活動が住環境改善に微力ながらも貢献できているのではないかと思います。今後も住民の方々に寄りそうことで本当に必要とされていることに支援を行っていきたいです。

九州大学 末廣研 B4 : 鶴田 敬祐



みんなの家のテーブル作成



制作した花壇の花植えWS



みんなの家完成式

[Column] 学生の声

乙女第3団地に初めて伺った際、着くや否や住民の方々に手厚くもてなして頂き、期待してもらっていると強く感じました。熊本高専のKASEI活動も乙女団地での活動も始まったばかり、今後も継続して関わっていきたい。

熊本高専 下田研 AP1 : 小嶋 晃平

甲佐町乙女団地

Kosa-machi Otome

九州大学 末廣研・熊本高等専門学校 下田研

10月末には白旗団地の「みんなの家」完成式が無事終了し、白旗団地での活動がひと段落しました。11月に町のささえあいセンターの職員の方に話を聞く機会があり、活動ができていない乙女団地の住民の方々から「うちの団地にはボランティアがほとんど来ない。いつも白旗ばかり。」などといった意見をたびたび聞くとのことでした。

そこで、乙女団地での活動も視野に入れて、12月から2月初めにかけて聞き取りを定期的に数回行いました。聞き取りの最中にはみんなの家のカギを管理されている住民の方にもたまたま知り合うことができ、その方を中心に聞き取りを行って行く中で、ごみ捨て場にごみを出すたびに野良猫が荒らしにくることに住民の方々は困っているようでした。そこで3月に乙女団地での初めての「ものづくり」として既存のごみ捨て場の修繕に行きました。団地に到着すると、住民の方々がお昼ご飯を準備してくださっていて、みんなの家でお腹いっぱいご飯をごちそうになりました。作業の間にはおやつも持ってきてくださって、おやつをいただきながら今の生活で大変なことなどいろいろなお話が聞けました。肝心のごみ捨て場修繕は、既存のごみ捨て場の微妙な寸法の違いに多少手こずることはありましたが、より使いやすいくみ捨て場になったと思います。この活動を第一歩に乙女団地への加勢も行っていきたいです。



みんなの家で昼ご飯をごちそうになる



ごみ捨て場修繕WS作業の様子



ごみ捨て場修繕WS完成後



末廣 香織 | Kaoru SUEHIRO
九州大学 准教授 | Kyushu University, Assoc. Prof.



下田 貞幸 | Sadayuki SHIMODA
熊本高等専門学校 教授 | National Institute of Technology, Kumamoto College, Prof.

九州大学 末廣研・熊本高専 下田研

林 孝之、川谷 大輔、遠藤 由貴、谷口 和弘、吉岡 大貴、鶴田 敬祐、

Ester Peralta、吉岡 大貴（ 趙研究室）

小嶋 晃平、井島 拓也、許斐 ももこ、永野 蓮太、西田 みずき、藤井 祐稀、

藤掛 佑基、松田 崇志、吉村 龍、藏原 周太郎、吉海 光大

益城町飯野小団地

Mashiki-machi Iinosho

九州工業大学 佐久間研

12月10日、自治会長の草野さんとの初めての話し合いを行いました。住民の方の意見として「みんなの家のデッキを広くしてほしい。車椅子利用者用のみんなの家への動線を新たに確保してほしい」との意見が得ることができました。

話し合いの中で、これからそこをいかに改善するかの検討を我々が提案をする事になり、意見を持ち帰り改善策を持って次の打ち合わせを行うこととなりました。

3月17日、前回受けた要望を踏まえて、みんなの家をより豊かにするための提案を行いました。

それと同時に、現状の課題と改善策の検討を行うかたちになり、「みんなの家の縁側の拡張案（デッキを付け足す）」、「団地の敷地内に子どもの遊び場や大人の休憩場所の提案」の2つの点を提案しました。自治会長の草野さんは、提案に対して好意的な反応をいただくことができたためこれから実施に向けて取り組みたいと思っています。

そのこととは別で、住民の方々から「寄贈されたペッパー君（ロボット）の収納が欲しい。テレビ台が欲しい」との意見もあり、これから木材を用いて住民の方と作ることを企画しています。



みんなの家外観



スタディ模型と子どもたち



佐久間 治 | Osamu SAKUMA
九州工業大学 教授 |
Kyusyu Institute of Technology, Prof.

[Column] 学生の声

話し合いが進み、自分たちができることが見えてきました。仮設であることもあるため夏のイベントを行うまでに実施ができればイベントもしやすい環境を作ることができるため、これからの活動が忙しくなりそうです。

九州工業大学 佐久間研 M1: 今井 智也

九州工業大学 佐久間研

石橋 凌、今井 智也

西原村小森第1団地

Nishihara-mura Komori dai-1

長崎大学 安武研・内田 貴久

2016年10月30日、この日が小森第1団地での初めてのKASEI活動となりました。小森第1団地では「本格型みんなの家」の意見交換会がなく、初めて担当団地の方にお会いする日となり、どんな方が住まわれているのか、第1団地の方も参加しやすい工夫をしようということで、小森団地担当の九州大学菊地研究室、西日本工業大学岡田研究室・三笠研究室、佐賀大学平瀬研究室の協力もあり、第1団地のみんなの家の前で焼き芋をふるまって頂きました。第1団地の方も上棟イベントに参加されており、お話を伺うことができました。2017年1月20日、私達長崎大学の2回目のKASEI活動では書き初めを行い、甘酒やホットココアなどをふるまいました。当日雨だったこともあり、イベントへの参加者は少数でしたが、数名参加していただき、それぞれ思いの言葉を書いていただき、その中で今の生活状況や長崎の話などをさせていただきました。イベントにお越しいただいた方の中に小学生の子どもが時間いっぱい書き初めや習字、長崎に対するメッセージなどを頂け、大変ありがたく思いました。また、参加していただいた方からみんなの家の利用状況やみんなの家を利用したイベントの頻度、みんなの家の活用方法の要望など様々なお話を伺うことができました。今後は、夏季に向けたイベントを現在検討中で夏場をより快適に過ごすことができるものを一緒に考えることができる企画を考えているところです。



書き初めイベント1



書き初めイベント2



小森団地上棟イベント



安武 敦子 | Atsuko YASUTAKE
長崎大学 准教授 | Nagasaki University, Assoc. Prof.



内田 貴久 | Takahisa UCHIDA
内田貴久建築設計事務所 |
uchida takahisa architect design office

長崎大学 安武研究室・内田貴久

甲斐 悠介、竹村 潤、山下 素史、石本 隆之介、黒板 未来、佐々木 宏太、鶴地 宏海、丸山 一寿

長崎大学 安武研M2: 甲斐 悠介

[Column] 学生の声

どんなイベントが仮設住宅に住まわれている方が喜ぶのか。また、どんなイベントならたくさんの方が参加するかなどを考えるのが楽しいが実際にやってみると難しさもありました。

西原村小森第2団地

Nishihara-mura Komori dai-2

九州大学 菊地研・黒瀬 武史

西原村小森第2団地では、8月から住民の皆さん、設計者チームの皆さんと本格型みんなの家について意見交換会を行ってきました。12月のみんなの家完成を前に、みんなの家の前の広場をどのようにするか、住民の皆さんと一緒にワークショップを行って考えました。途中からは子供たちもやってきて、模型を動かしながら広場でサッカーがしたい、卓球がしたい、とたくさんの意見を出してくれました。その結果、みんなの家の座敷からよく見える位置に桜を植え、広場でポール遊びをしても危険がないよう、道路沿いにツツジを植えることが決まりました。また、住民の方から集落で被災したツツジを一部もってきて植えたらどうか、という提案もいただき、新しいツツジと一緒に植えることになりました。

完成式当日、式典の前に住民の皆さんと一緒に、広場にツツジを植えました。子供たちにみんなの家に入っていいよ、と言うと完成したばかりのみんなの家でお菓子を食ったり、走り回ったり…仮設団地内に子供たちの笑い声が響き、とても賑やかになりました。西原村小森第2団地では、これまでの意見交換会でも子供たちの遊び場がないことが問題として挙げられていましたが、みんなの家の竣工後は毎朝、鍵番の住民の方が鍵を開けてくださっており、子供たちはみんなの家で自由に遊ぶことができます。

KASEIとして、西原村小森第2仮設団地での1年目の活動は、本格型みんなの家を中心に行ってきました。震災発生から1年が経ち、仮設団地の住民の皆さんの状況も、それぞれ変わってきています。2年目は、そういった変化に対応しながらも、引き続き、住民の皆さんの仮設団地での生活が少しでも改善されるよう、私たちにできる形で支援を続けていきたいと考えてます。



菊地 成朋 | Shigetomo KIKUCHI
九州大学 教授 | Kyushu University, Prof.



12月4日 広場づくりワークショップ



12月10日 ツツジを植えている様子



開花したツツジと震災ツツジ(中央)



黒瀬 武史 | Takefumi KUROSE
九州大学 准教授 | Kyushu University, Assoc. Prof.

九州大学 菊地研究室・黒瀬武史

野口 雄太、前川 遥奈、丸山 千尋、藪井 翔太郎
佐土原洋平(志賀研究室)

[Column] 学生の声

第2団地は特に子供が多く、子供たちの意見も取り入れてみんなの家や広場を考えることができ良かったと思います。広場の整備などまだ完了していないこともあるので、今後も継続して活動を続けていきたいと思っています。

九州大学 菊地研M1: 前川 遥奈

西原村小森第3団地

Nishihara-mura Komori dai-3

西日本工業大学 岡田・三笠研

西原村における西日本工業大学チームの活動は、5月4日の星田集落訪問から始まった。集落出身の学生が4年次在籍しており、その実家が被災したことが、星田へ駆けつけた直接のきっかけである。その後KASEIプロジェクトの立ち上がりを受け、星田での被災状況調査や避難行動調査と並行して、星田集落の被災者が入居する小森第3団地の支援を担当することになった。

28年度の活動は概ねみんなの家の建設に関するものであった。8月の住民意見集約WS、10月の上棟式と焼き芋の振る舞い会、12月の広場づくりWSの3つが主要な活動である。意見集約WSでは住民の中にはっきりと戸惑いの色がみとれた。生活の半分を元集落に残した中での仮設居住や、家屋や生業の再建に向けた不安の中で、次々と事業が進んで行くことに対する戸惑いである。上棟イベントとして、西原村の特産品であるシルクスweetを使った焼き芋の振る舞いを企画したのは、そうした戸惑いに対する思いが背景にあった。単なる仮設団地の行事ではなく、西原村の、仮設暮らしの先につづく集落の復興に希望を持てるようなイベントにしたかったのだ。実際には、事前準備から当日の振る舞いまで地元の方に大にお世話になった。手助けに行ったのか助けられにいったのかわからない有様であったが、多くの子供達が集まり、焼き芋片手に大人たちとはしゃぐ姿は、むしろ私たちが勇気付けられるものであった。

震災から1年が過ぎ、みんなの家の使われ方も定着してきたように見える。復興にむけた動きも徐々に各地で目立ち始めている。そんな中、各地のKASEI活動も次のフェイズに移りつつあるのだろう。ささやかでも、前を向く住民に寄り添える活動を模索していけたらと思う。



岡田 知子 | Tomoko OKADA
西日本工業大学 教授 |
Nishinippon Institute of Technology, Prof.

[Column] 学生の声

西原村が故郷ということもあり関わらせて頂いたKASEIですが、活動を通し、改めて家族やふるさとに向き合うことができました。今後も実家の再建を含め村の為にできることを探して行けたらと思っています。

西日本工業大学 岡田研B4: 東 幸貴



8月住民意見集約WS



10月上棟焼き芋



12月広場づくり



三笠 友洋 | Tomohiro MIKASA
西日本工業大学 准教授 |
Nishinippon Institute of Technology, Assoc. Prof.

西日本工業大学 岡田・三笠研究室

天野 健太郎、加藤 幸生、黒田 拓也、相良 洋孝、高野 菜穂、東 幸貴、平田 くるみ、吉田 成美、片山 英子、鳥袋 美鈴、津川 七海、宮吉 早紀、吉田 郁乃、ラム タン グッド、有瀬 千絵、加藤 魁人、国仲 修真、是本 健太、廣門 優太

西原村小森第4団地

Nishihara-mura Komori dai-4

佐賀大学 平瀬・後藤研

西原村小森団地は第1から第4まで（現在では第5まで）が、隣り合って1つの大きな仮設団地となっており、中でも小森第4団地はその東に位置しています。第4団地でも他の小森団地と同様に設計チームの方々と一緒に本格型みんなの家の建設に伴いKASEI活動を行ってきました。8月の意見交換会を皮切りに10月の上棟式、12月の完成式と様々なWS・イベントを行ってきました。

中でも印象的だったのは小森団地の合同イベントとして行った上棟式・完成式の際の子供達の様子です。上棟式では各団地で餅まきを行いその後、西原村の特産でもあるシルクスweetを使って焼き芋パーティーを行い、小森団地に住む大勢の方々に参加して頂いたのですが、中にはこの日初めて一緒に遊んだという子供同士もいて、自己紹介をしていました。これまでそれぞれの団地ごとで遊んでいた子供達が、団地の垣根を超えて楽しんでくれました。完成式の日、第4団地では西原村の野菜を使って豚汁を振る舞いました。不器用な手つきを見かねた地域のお母さん方に助けられながらなんとか完成まで漕ぎつけたのですが、そこでも子供達が団地の枠を超えて友達を次々に連れてきてくれました。

小森団地は第1から第4とそれぞれが別々の団地として扱われており、日常もなんとなく分かれているのが現状です。地震やその後の仮設団地という外的要因により分断されてしまった地域の中で、こうした合同イベントを行うことによって、地域にとって新しい交流のきっかけをつくることができたのは一つの成果だったと思っています。こうした建築イベントによって新しい交流を生み出すことができたというのは、私たち学生にとっても貴重な建築的体験でした。

熊本地震から1年が経ち様々に変わる状況の中で、私たちにもまだ何ができるかわからない状態ですが、建築という行為を通して、ゆっくりでもKASEI活動を続けていきたいと思っています。

[Column] 学生の声

みんなの家というモノづくりの中で、上棟式や完成式というコトを企画し、住人の方々・学生が大勢集まり、みんなでワイワイしながら食べ物の良い匂いのするトキを共有することができたのは何よりの体験でした。

佐賀大学 平瀬研D1: 副田 和哉



10月30日 上棟式イベント



12月10日 みんなの家完成式 集合写真



12月10日 豚汁パーティー



平瀬 有人 | Yujin HIRASE
佐賀大学 准教授 | Saga University, Assoc. Prof.

佐賀大学 平瀬・後藤研究室

副田 和哉、荒牧 優希、内藤 沙耶、仲 浩慶、山田 章人、石井 陽菜、坂本 明文、広谷 洗多、荒木 達也、西 諄子、大久保 健太、池尻 真人、江崎 史浩、岳 嘉麟、中村 実咲、永山 貴規、林田 大晟、NUTHAWAT RATTANASUPORNCHAI、JONGSUEBSOOK JAKKRAVUTH、プリア スレスタ、パクジェ ヨブ、井上 尚弥、深江 大貴、森山 拓弥（三島研究室）

益城町木山団地

Mashiki-machi Kiyama

山口大学 内田研・牛島 朗

我々のチームは、「くまもとアートポリス事業」の本格型「木山みんなの家」の設計を内田教授のチームが担当することになり、そのお手伝いと、「KASEIプロジェクト」が同時に進行するという特殊な状況でした。

2016年8月、応急仮設住宅への入居が始まるのと同時に設計がスタートしました。住戸数220戸の比較的大きな団地であるため、既に規格型「みんなの家」が3棟整備されており、本格型「みんなの家」は40m²タイプに隣接する敷地でありました。

8月31日と9月10日の2回、住民の方に集まってもらい、必要な機能や空間について自由に意見を出してもらい意見交換会を開催しました。設計チームが考えた計画案の模型を学生がつくり、住民の方に説明をしたり、参加できなかった住民の方に向けて、意見交換会後にニュースを作成し、配布したりしました。住民から出された意見を尊重し、以下の基本方針に基づき施設内容をまとめています。①両端に設備や機能を配置し、中央部に大きなワンルーム空間を確保する。②40m²集会所とL型につながる配置とし、大きな軒下空間をつくり縁側が広場を囲む。③子どもが安心して遊べる広場を設け、花壇や芝生のコーナーをつくる。

面積と予算の条件を満たすために、主要な構造材に一般住宅の標準部材である105mm角材を使い、徹底してローコスト化を図っています。同様の考え方で、学生が中心となり、120mm×30mm材の単一部材で家具を製作し、花壇は105mm角材のみで作りました。

12月3日、竣工時に完成イベントを行いました。イベントは、KASEIの活動で、住民の方と一緒に餅つき、家具製作、花壇づくりに取り組みました。このイベントをきっかけに多くの住民が参加していただき、「木山みんなの家」について自分たちの施設であるという意識が芽生えたように感じました。これからは、住民の方々が自分たちで独自の使い方のルールをつくり、真の意味で「みんなの家」に育てていただきたいと思っています。今後も、様々な形で支援を続ける予定です。



本格型「木山みんなの家」内観



本格型「みんなの家」外観



12月3日 竣工イベントの様子

[Column] 学生の声

日本の建築の設計段階から竣工まで見ることができて、とても貴重な経験でした。完成イベントには、たくさんの住民の方が集まって、建築のパワーというものをとても感じ、感動しました。

山口大学 内田研 B4: CHOW YI XING

[Column] 学生の声

まだ、みんなの家の意見交換会を1回実施したのみなので、益城町木山団地での活動で培ったノウハウを活かして、家具づくりや広場の整備、イベントの企画等にこれから取り組んでいきたい。

山口大学 内田研 M2: 桑原 建大

宇土市境目第2・境目第3団地

Uto-shi Sakaime dai-2, sakaime dai-3

山口大学 内田研・牛島 朗

2017年3月30日、境目第2・3団地の「みんなの家」を考える意見交換会を住民の方と設計チーム(内田文雄+西山英夫(西山英夫建築環境研究所)と学生で行いました。5名の住民の方に参加していただきました。

まずは、「みんなの家」について知ってもらうため、私たちが以前、担当した「益城町木山みんなの家」を例に説明しました。次に、設計チームが周辺の環境や敷地の形状に合わせて考えた、異なる4つの素案を図面と模型を用いて説明しました。その後、仮設住宅の生活で困っていること等を踏まえて、「みんなの家」の計画案についての意見を出してもらいました。設計者が話を聞き、学生は出された意見をポストイットにメモをとったり、模造紙上に分かりやすくレイアウトしたりしました。

主な論点としては、「床仕上げをどうするか」、「土足のまま上げられるようにするか、しないか」、「水回りとして必要な機能」、「室内空間にするか、屋根だけ屋外空間にするか」、「仮設住宅団地が撤去された後の使い方をどうするか」ということが挙げられました。意見交換会後は、参加できなかった住民の方に向けて学生がニュースを作成し、配布・掲示しました。

計画案は現在、検討中です。まだ、顔は分かるが、話したことのない住民の方もいるという意見もあったので、誰でも利用しやすく、使いたくなるような「みんなの家」を設計チームで考えていきます。また、この「みんなの家」整備が住民の方の交流のきっかけとなるように、住民の方と一緒に家具や広場づくり、竣工イベント等を行っていききたいと思います。



3月30日 WSの様子1



3月30日 WSの様子2



3月30日 WSの様子3



内田 文雄 | Fumio UCHIDA
山口大学 教授 | Yamaguchi University, Prof.



牛島 朗 | Akira USHIJIMA
山口大学 助教 | Yamaguchi University, Assoc. Prof.

山口大学 内田研・牛島 朗

桑原 建大、福井 啓晃、江口 透悟、藏園 悠介、齋藤 拓海、千三木 唯央里、西山 菜月、松永 悠、CHOW YI XING

大津町室団地

Ozu-machi Muro

九州工業大学 徳田研
九州大学 田上研・朝廣研
福岡大学 四ヶ所研・宮崎研

室仮設団地は、大津町の中心部から少し北に登ったところに位置し、30世帯ほどの方が入居しています。私たち学生が初めて伺ったときは、求められていることが何なのかはまだ分かりませんでした。そこで今後どのような活動が望まれているのか、意見交換会を開いて住民の方の意見を伺うことにしました。

住民の方から出た意見としては、みな大津町の色々な地区から来ているので、全然顔見知りがないと寂しいというものでした。そこでまずはお互いが顔見知りになれるような簡単な集まりを開きたい、という話になりました。また、仮設住宅は狭いので、以前使っていた家具を持ち込めず困っているという話も伺いました。

意見交換を踏まえ、私たちは仮設住宅に置く家具を作るイベントを行うことにしました。ものづくりを通して仮設住宅の環境改善に貢献するとともに、住民の方々同士の交流にもつながれば良いと思っていました。当日は飛び入り参加の方々も含め、10世帯以上の方々とテレビ台や靴箱、本棚などを作ることが出来ました。また、大津町名産の唐芋を煮て持って来てくださった方もおり、休憩時には唐芋を食べながら楽しく作業を進めることができました。

実は、事前申し込みの段階では参加希望者は少なく心配していました。しかしイベントが始まると、子供たちの楽しそうな声が団地に響き、様子を見に来た人がそのまま参加したりと、どんどん口コミで参加者が増えていったのが印象的でした。被災地での支援活動においては、参加者が見込めなかったとしても、まずは活動を始めてみることで色々な方々のニーズを引き出すことができるということを学んだような気がします。

震災から1年経ちましたが、今後も室団地で少しでも要望があれば積極的に出かけていき、仮設団地での暮らしをより良いものにするお手伝いをさせていただきたいと思っています。



活発な意見が飛び交った意見交換会の様子



2016年11月に行った家具作りイベント



完成した靴箱

[Column] 学生の声

KASEIプロジェクトでは、熊本に足を運ぶ度に出会った沢山の人にお世話になり、元気を届けるはずが元気をいただいて、色々なものをもらって福岡に帰っていた気がします。頂いた分成長して、また熊本に加勢しに行きます。

福岡大学 四ヶ所研 B4 西野 雄太

[Column] 学生の声

KASEIを通じて学んだことは沢山あります。中でも、仮設住宅という決して恵まれた環境とはいえななかで、互いに励ましあい生活する住民の方々の姿は、何気ない日常のコミュニティの大切さに気づかせてくれました。

福岡大学 四ヶ所研 B4: 河島 有希

大津町南出口団地

Ozu-machi Minamideguchi

九州工業大学 徳田研
九州大学 田上研・朝廣研
福岡大学 四ヶ所研・宮崎研

室南出口団地は約57戸の団地を有しており、大津・南阿蘇地区の中では比較的大規模な仮設団地です。私たちが現地へ訪れた際には既に団地住民による自治体が仮設団地建設初旬から迅速に結成され、仮設団地内でのみんなの家の運営管理、ボランティアの受け入れ体制が整っていました。団地内ではみんなの家を利用したお茶会やマッサージ等の数多くのイベントも行われており、他の団地と比較しても良好である印象でした。しかし、10月のみんなの家意見交換会(団地住民からお話しを聞く場)では「下駄箱などの収納家具がほしい」、「暦のイベントを行いたい」等多くの意見が得られたのは事実です。既に多くのイベントを抱える本団地において、私たちKASEIで出来ることはイベントを企画していくのではなく、意見交換会で得られた意見から今私たちに出来ることを少しずつ支援していくことでした。

意見交換会でニーズのあった家具を組手什を用いて作製し、11月に行われた園芸セラピーでは花のお弁当箱を作りました。特に印象深かったのは、被災年の年末に行われた餅つきイベントです。小さい子から高齢者の方、他のボランティア団体等の数多くの方が参加し、メディアに取り上げられるほどの盛大なイベントになりました。団地住民の方からは「また来たね!」と声をかけられ、少しずつですが顔見知りの方も増えてきました。餅をつく際に団地住民の方からは「腰が抜けとる!それじゃお嫁さんもらえんばい!」と喝が飛び、周囲は笑いに包まれました。「いっぱい食べなっせ!」とお餅と豚汁を、帰り際には「遠方からわざわざありがとう!また顔見して!」と温かいお声をいただきました。1日1日の活動が終わる度に支援をする側であったはずの私たちが逆に元気を与えていただいたように思えます。正直私たちが今まで何が出来たかというのは定かではないですが、温かい言葉で迎えてくれる方がいるのは確かです。

今後とも少しずつではありますが、笑顔と若さを届けていきたいと考えています。

[Column] 学生の声

入居者の方と電話でお話をした時に、健康状態の不安定さ等の本音をポロポロと話してくれました。長期に関わることの大切さを痛感し、イベント以外にも現地に行き、会話をすることも必要かもかもしれません。

九州大学 田上研 M1: 磯上 千尋



靴箱作製



園芸セラピー



餅つき

[Column] 学生の声

仮設団地でイベントを行うと、住民の方々が料理をしてくれたり、トラックを出して資材の運搬をしてくださったりと、助けられっぱなしです。これからもこのようなつながりを大切にしながら活動を続けていきたいです。

九州大学 田上研 B4: 福田 健

南阿蘇村陽ノ丘団地

Minamiaso-mura Hinooka

九州工業大学 徳田研
九州大学 田上研・朝廣研
福岡大学 四ヶ所研・宮崎研

熊本県南阿蘇村に位置する陽ノ丘仮設団地は、92世帯ほどの方々が入居されている南阿蘇村で最も大きな仮設団地です。熊本では、このように規模の大きな仮設団地には、入居後、住民の方と一緒に考える「新しいみんなの家」ができます。

陽ノ丘仮設団地では、北九州にある古森設計事務所が、そのみんなの家を設計してくださいました。9月と10月に開かれた2度のワークショップに、我々も加勢させていただき、参加された住民の方々と共に「大きな対面式のキッチンがあると嬉しい」「外からも入れるトイレが欲しい」など、沢山の意見を交換しながら、これからどんな楽しい家になるだろうかと期待に胸を膨らませていきました。

そして12月、沢山の人の思いが詰まった、大きな縁側のある、陽ノ丘にしかない「みんなの家」が完成しました。完成を祝って企画したオープニングイベントには、サプライズゲストのくまモンをはじめ、大勢の方に足を運んでいただきました。住民の方々と力を合わせてつききった総重量10升のもち米は、仮設団地のお母さん達の手によって、お雑煮やお汁粉、きな粉餅など、完成を祝う、温かな料理に姿をかえ、我々を含め、集まった大勢の方々のお腹を満たしてくれました。そんな盛り沢山で賑やかな1日を通して、仮設団地に少しでも元気を届けることができたのではないかと思います。

それから年が明け、2017年がスタートし、新年のご挨拶にと、みんなの家で使ってもらえるように作成した大きなテーブルを持って仮設団地に足を運びました。その日は、住民の方々と一緒につくったご汁を食べながら、沢山の話を聞かせていただきました。みんなの家の広々とした縁側に学生とお母さん達が並び、和やかに話をする姿は、陽ノ丘でしか見ることのできない、心に残る風景だったと思います。

これから時間が経ち、仮設団地を取り巻く環境、住民の方々の生活が変化していく中で、私達に何ができるのかを考えながら、これからも少しでも力になれるように加勢していきたいと思っています。

[Column] 学生の声

他のボランティアの方の指導を受けながら初めて餅つきの合いの手をしました。住民の方のあたたかい声援を受けながら楽しく活動できました。今後も団地の住民の方や他のボランティアと関わっていきたいと思っています。

九州工業大学 徳田研 M1: 大久 美保



ワークショップの様子 住民の方が発表してくださいました



オープニングイベントでの餅つき。餅をついているのは設計者の古森さん



住民の方とだご汁を縁側で

[Column] 学生の声

昨年度から大津・南阿蘇の団地に関わらせていただきました。学生の未熟者ではありますが今出来ること、学生だからこそ出来ることを再度見つめ直しながら今年度の活動に取り組んでいきたいと考えています。

九州工業大学 徳田研 M2: 木村 圭佑

組手什

Kudejuu

「組手什(くでじゅう)」とは、切り欠き加工がされた長さ2mの杉材を組み合わせて作る、木製の組立キットです。組み立ての容易さに加え、何度でも分解できるという自由度の高さから、東日本大震災の際にも避難所でのプライバシー保護や生活用品の整理などに用いられてきました。

九州大学、九州工業大学、福岡大学の3大学合同チームは、南阿蘇村で行われた組手什ワークショップへ参加したことをきっかけに、自分たちでも南阿蘇村や大津町で組手什を使ったワークショップを行ってきました。

11月、12月に行ったワークショップでは、大津町室仮設団地では200本、南阿蘇村陽ノ丘仮設団地では1000本ほどの組手什を使用し、住民の方々と一緒に家具作りを楽しむことができました。また、要望のあった仮設団地のみんなの家に、傘立てやテレビ台などを作り寄贈する、という活動も行いました。

これらの活動の開催に当たっては、NPO法人ふるさと創生、公益社団法人国土緑化推進機構に組手什の確保および活動ノウハウを提供していただき、また活動当日は同NPOに加え、九州森林インストラクター会の皆様にご加工のお手伝いをしていただきました。組手什を初めて扱う学生が、このような活動を行うことができたのも様々な方のご支援のおかげです。この場を借りてお礼申し上げます。



徳田 光弘 | Mitsuhiro TOKUDA
九州工業大学 准教授 |
Kyusyu Institute of Technology, Assoc. Prof.



田上 健一 | Kenichi TANQUE
九州大学 教授 | Kyushu University, Prof.



四ヶ所 高志 | Takashi SHIKASHO
福岡大学 助教 | Fukuoka University, Assist. Prof.



久木野総合センターで行われたワークショップに参加。集合写真



大津町で行った組手什ワークショップの様子



朝廣 和夫 | Kazuo ASAHIRO
九州大学 准教授 | Kyushu University, Assoc. Prof.



宮崎 慎也 | Shinya MIYAZAKI
福岡大学 助教 | Fukuoka University, Assist. Prof.

九州工業大学 徳田研・九州大学 田上研・福岡大学 四ヶ所研
木村 圭佑、大久 美保、財前 貴行、前川 元貴、磯上 千尋、田中 精耕、野添 侑斗、河合 恵美、福田 健、中原 有理、遠藤 智樹、有馬 駿、山中 雄登、元田 陵正、半田 琴美、染矢 啓太、中島 大貴、星 哲郎、西野 雄太、原 昌平、山根 あい、小田 響

御船町東小坂団地

Mifune-machi Higashi Ozaka

熊本大学 田中研・星野研

5月から計画が始まった仮設住宅(設計:坂茂建築設計)及び熊本大学田中智之研究室が提案する仮設住宅共用部は、まず仮設住宅が8月に竣工し9月から入居が開始されました。

9月16-25日、東小坂仮設団地で初めてのKASEIの活動として、仮設住宅の室外機隠しのルーバーと共用部に置くテーブルを製作しました。コミュニティスペースもまた遣り方を行い着工しました。東小坂仮設団地へは下見や打ち合わせの際に何度か訪れていましたので、住民の方も気軽に声を掛けてくださり団地内での活動も快く迎え入れて頂きました。製作したルーバーの設置を行った際も“見栄えが更に良くなった”など良い意見を聞くことが出来ました。

10月15日、基礎の型枠と仮設住宅内に置く机を製作しました。経費削減のため型枠の木材はハウズビジョンで使用された木材をリユースし、できる範囲は学生やボランティアによって施工しました。

11月13日、コミュニティスペースの上棟式を行いました。式の中では、新しいタイプの木造仮設住宅の説明や、これからできるコミュニティスペースの使い方等の説明を行うことで、地域住民の理解を深めてもらいました。また配られたお餅は住民や地域の方に作って頂き、子供たちも含めたくさんの方々にコミュニティスペースを認知して頂けたと思います。

11月11日、コミュニティスペースに設置する紙管天井の製作を始めました。木漏れ日のような空間をつくるために9-10月に製作していたモックアップを元に、地震後避難所で間仕切りとして使われていた紙管をリユースし製作しました。作業は学内でを行い、現地に運べる大ききまで組み立てました。

12月12日、製作した紙管天井の設置を現地で行いました。紙管天井のデザインから資材調達・製作・取り付けまでを学生が行うことで、建物の一部ではありますが実施の設計や建築施工の難しさを学びました。

12月18日、コミュニティスペースが竣工しオープンイベントを行いました。イベントの中では坂茂氏・田中先生と地



9月16日 ルーバー製作の様子



11月13日 上棟式の様子



11月17日 紙管天井製作の様子

[Column] 学生の声

学生が毎日朝から晩まで団地で作業するという奇妙な環境がいい意味で住民の方を巻き込んでいきっかけを作り、モノができあがるワクワク感や喜びと一緒に共有できたことが活動の大きな一歩になったと感じています。

熊本大学 田中研 M2: 吉海 雄大

[Column] 学生の声

熊本地震から1年以上が経った今去年の活動を振り返ると、考えることよりも早く行動していたように思います。活動から得た多くの経験を今年度は住民の方に還元できるような活動を行っていきたく思います。

熊本大学 田中研 M1: 福嶋 海仁

域住民とのクロストークが行われました。それまでは地域住民と直接関わっていませんでしたが、“再建の相談を誰にしたらいいかわからない”など情報の不足に関する内容が多く挙がったため、東小坂団地で相談会を定期的に行うことを決めました。

1月6日、談話室内にワックスを塗りに行きました。日当たりが良い日だったのでデッキに腰掛ける方もいらっしやり、これから日常的に使われる場所になってほしいと思うとともに、使い方への工夫も考えなければいけないと思いました。

1月14日、コミュニティスペースの外構に花壇を製作しました。この花壇は、熊本地震で損壊し不要となった瓦を花壇のマテリアルとして再利用しています。作業には住民の方にお手伝い頂き楽しく作業を進めることができました。お昼は暖かいうどんの差し入れを住民の方々から頂き、コミュニティスペースで一緒に食べました。

建築概要: 御船町東小坂仮設住宅団地コミュニティスペース

御船町東小坂団地では、木材と合板を利用した構造パネルを用いた新しいタイプの木造仮設住宅が建設されました。わずか10世帯の小さな団地ですが、周辺の方々も含めて集まることのできるような、地域の縁側のようなコミュニティスペースを提案しました。2棟の仮設住宅をつなぐように大きな木造屋根を架け、その下には小さな談話室と大きなデッキを設けました。デッキはおおらかな円弧を描き、みんなでつくる庭を囲み、周辺の景色を愉しむことのできるようなデザインとしました。また避難所から応急仮設住宅・恒久住宅を一連のプロセスと捉え、避難所で使用した「紙管間仕切りシステム」の紙管を木漏れ日を演出する天井材としてリユースするなど、コスト削減や記憶の継承にも取り組みました。



田中 智之 | Tomoyuki TANAKA
熊本大学 准教授 | Kumamoto University, Assoc. Prof.

熊本大学 田中・星野研究室

有光 史弥、林原 孝樹、吉海 雄大、大城 俊、小山 遼太、福嶋 海仁、ワナズルフィア、和泉 秀、小川 航輝、河口 ひかり、古賀 壮一郎、中村 太紀、藤田 智之、吉永 優成、甲斐 悠加、川端 宏人、澤田 拓巳、福留 愛



12月18日 オープンイベントの様子



1月14日 花壇製作の様子



御船町東小坂仮設団地コミュニティスペース 外観・内観



星野 裕司 | Yuji HOSHINO
熊本大学 准教授 | Kumamoto University, Assoc. Prof.

益城町テクノ団地

Mashiki-machi Tekuno

2016年10月30日、県内最大級の仮設団地益城町テクノ団地に岡野道子氏が設計した「みんなの家」の上棟式がありました。その上棟式にあわせて、学生を中心に「みんなの家」の1/100ペーパークラフト模型を子ども達と一緒に作るワークショップ(以下、WS)を開催しました。このWSのねらいは、大きく3つありました。それはKASEIとして初めての活動だったので、住民みなさんにKASEIを認知してもらうことと、子どもたちとみんなの家の模型を学生と一緒に作ることでみんなの家の認知度を深めること、最後に「みんなの家」に愛着を持っていただけるようにどんな遊びをしたいのかについて調査することです。

当日は、たくさん子ども達が、会場であるD工区談話室とF工区集会所にやってきて、半分は模型を作りながら、半分は外で学生と遊んだり、大盛況でした。また、親御さん・お年寄りの方向けに、お茶を飲んだり、お菓子を食べながら“おしゃべり”をするお茶っこサロンを同時開催しました。“おしゃべり”には仮設住宅での暮らしやみんなの家について、なんでもない世間話など、普段接することのできない住民の方々の生の声を聞く事ができました。「正直、周囲に住む人もわからないし夜寝る時も車の音がしたり、地震がきたりで眠れない」という声もあり、ボランティアとしてではなく、同じ熊本に住む者として少しでもより良い生活にできるような手伝いができれば、と強く思った出来事でもありました。模型作りワークショップの後に、工務店さん主催で、「みんなの家」で餅まきもありました。餅まきのおかげもあって、住民の方も学生もとても楽しめた、いい初めてのWSにすることができたと考えています。

2016年12月3日、待望の「みんなの家」の竣工式がありました。上棟式同様、この日も竣工式に合わせていくつかのイベントを開催および式の運営手伝いを行いました。行った活動は、家具製作WS、子どもと歩くウォークラリーおよび団地ロゴマークコンペです。運営の手伝いに関しては、テキスタイルデザイナー安藤陽子さん主催の座布団製作



「みんなの家」の説明をする設計者岡野道子さん



1/100 ペーパークラフト模型



竣工イベント後の集合写真

[Column] 学生の声

テクノ団地は他と比べ戸数が多いので当初は住民同士のつながりが弱いのではないかと懸念していたが、震災から1年が経ち、訪れるたびに団地が温かみを帯び、まとまりができてきたと感じている。

有明高専 藤原研建築学専攻2年: 青田 興明

[Column] 学生の声

私はKASEI活動を通して、人と人との繋がりの大切さを改めて感じました。これからも、たくさんの方が暮らす益城町テクノ仮設団地で人とのコミュニケーションを大切にKASEI活動を頑張ります。

有明高専 藤原研B5: 柴田 逸樹

WSと東日本大震災で被災した岩沼から、地震の時のお返しにといただいた岩沼産米の配布をKASEI学生が手伝えました。家具製作WSの成果物は、「みんなの家」に置かれる家具です。設計から木材加工までを学生と「みんなの家」設計者、岡野道子さんと、協力して行いました。当日は参加された住民の方と一緒に家具の組み立てを行いました。あえて、組み立てを住民の方々と行ったのは、この家具に愛着を持ってもらうのはもちろん、「みんなの家」とともに長く付き合ってもらいたいという思いがあったからです。この家具は半年以上経った今でも大切に扱っていただいています。また、子どもと歩くウォークラリーの活動のねらいは、以前より住民の方から仮設住宅団地には子どもの遊べる場所が少ないという意見が多くありましたので、実際に子どもと一緒に団地を散策し、子どもの周りには遊べる場所や、危険な場所を探すというものでした。また、ウォークラリーの景品には、先家具製作WSで発生した端材を使って簡単なパズルやくまモンも用いたキーホルダー箱イスなどを準備し、多くの子どもたちにとって楽しく嬉しいWSにできたのではないかと考えています。当日は、「みんなの家」の周りでたくさん子ども達が遊んでおり、中には先日の上棟式イベントで友達になった子もおり、徐々にKASEIの学生と住民との距離が近づきつつあるのが感じられたイベントになりました。

組手什WSについて

2017年2月25日、学生と住民の方々が一緒に各々の仮設住宅内に欲しい家具を製作する、組手什家具作りWSを行いました。先立って行った調査で、多くの住民の方が仮設の収納に不便を感じていることが明らかになったことを受けて、仮設住宅に合った収納家具を作成するWSを企画しました。先行団地で組手什を使ったWSを実施した福岡大学や九州大学芸術工学部の学生からノウハウの伝授を受けることで、スムーズに準備することができました。

これは多くの大学の建築系学科が協力して行うKASEI

[Column] 学生の声

KASEIの活動は、講義では学ぶことができない現場での動き方を知ることができ、スキルアップに繋がっていると感じています。これからも、多々ある問題点の改善策を考え、熊本の復興支援に携わっていきたいです。

熊本県立大学B2: 大家 君香



家具製作WSの様子



家具製作WSで作成した机と座布団

[Column] 学生の声

KASEIの活動をしなが、環境改善という課題について考えさせられることが多く、貴重な経験になったと思う。この活動の記録が今後の仮設団地の運営ノウハウや学術研究に役立ってほしい。

熊本県立大学B2: 米原 睦貴

の特徴を十二分に発揮できた活動ではなかったかと考えています。組手仕の資材については、「NPO法人ふるさと創生」が申請した、緑の募金を活用した「熊本地震復興支援事業」の予算から、KASEIに寄付という形で1700本を提供していただきました。提供された組手仕の本数と学生スタッフ数から検討し、WSは最大30世帯の事前申し込み制としました。開催の2週間前にテクノ団地に全住戸にフライヤーのポスティングを行ったところ、ポスティング直後から参加希望の連絡があり、開催日の3日前には定員に達したためそれ以降は断らざるを得ませんでした。当日も予約キャンセルや材の余りで家具を作りたいと言っただけの住民の方は多くいらっしゃいました。この時、収納家具に関する需要の高さが伺えると同時に、益城町テクノ団地は516戸の仮設住宅で構成された大規模団地のためイベントの規模に対する十分な想定が課題であると切に感じられました。WS当日は、組手仕の特徴である、好みの大きさの家具を作れることを生かし、実際に参加者の仮設住宅へ伺い、参加者の要望を聞き、置き場所の採寸と必要となる家具を提案するというプロセスをとりました。熊本県央広域本部上益城地域振興局農林部林課の幸田享子さんをはじめ、4人の方々にサポートスタッフとして協力いただきました。この場で厚く御礼申し上げます。また、なるべく多くの要望を実現できるよう、家具の組み立てに関しては事前に何度も予行演習を行ったこともあり、当日受付も含めて44世帯分の参加者を受け付けることが出来ました。WS終了後も「今回は作れなかったので第2回も開催して欲しい」などの声も多くあり、組手仕家具をはじめ、震災から1年がたった今でも、ものづくりはまだ需要があると感じました。



組手仕を試作するKASEI学生



組手仕WSで住民の方が製作した収納棚

[Column] 学生の声

私はこのプロジェクトで砂場制作や広場整備などハード面の活動を行ってきました。苦労する面も多々ありましたが住人さんの喜ぶ姿を見ることができやがいが感じることができました。今後も仮設団地の環境改善に取り組んでいきたいです。

熊本県立大学 B2: 田上 雄基

[Column] 学生の声

私はフリーペーパー「てくてくの」の製作を通して、住民の方々と多くの場面でお話をすることができました。その中で得た意見や問題点を今後の製作に活かし、住民の方々がフリーペーパーを読んで元気になってもらえると嬉しいです。

熊本県立大学 B2: 加藤 里恵

てくてくのについて

2017年3月24日、KASEI学生発信の益城町テクノ団地向けフリーペーパー“てくてくの”創刊号を発刊しました。

これはKASEIの活動について住民の方々に知っていただくことよりも、月に1回行われる自治会長の会合での話や、益城町テクノ団地のサポートセンター「キャンナス」の紹介やお知らせ等を、団地住民に周知することを目的としています。毎月20日前後に発刊し、5月までに第3号まで発刊しています。編集、発行に当たっては、学生が主体となり、学生が感じ住民の方々に知っていただきたい、知りたいと考えられる内容を想定し編集を行なっています。これまでに掲載する事ができた内容を以下に示します。創刊号では、“てくてくの”発刊までの経緯・益城町テクノ団地協の使用できるようになった広場の紹介と自治会主催のさくら祭りの告知・4月14日に行う熊本地震一周忌の集いの告知と簡易灯籠の作り方について掲載しました。第2号では、一周忌の集いについて・キャンナスの紹介とスタッフの思いについて・以前から住民の皆様から募集していた広場名決定のお知らせ・テクノ団地で行なった全戸調査の結果報告について、を掲載しました。第3号では、5月25日に完成した砂場についての告知・自治会主体の全体清掃日の告知・5月13日に行われた中平マリコさんコンサート報告・熱中症予防について・子ども会発足について、を掲載しました。



佐藤 哲 | Satoshi SATO
熊本県立大学 准教授 |
Prefectural University of Kumamoto, Assoc. Prof.



ポストに投函したてくてくの



掲示板に貼られるてくてくの



藤原 ひとみ | Hitomi FUJIWARA
有明高専 助教 |
National Institute of Technology, Ariake College
Assist.Prof

熊本県立大学 佐藤研究室・熊本県立大学 鄭研究室・
熊本県立大学 環境共生学部居住環境学科・
熊本県立大学 総合管理学部総合管理学科・有明高専 藤原研究室
小濱 光時、宇治野 里帆子、加越 由樹、金城 正汰、津田 桂佑、鳥越 柚子、中野 未香子、山田 大貴、高島 遥、平山 響子、岩崎 夏子、岩本 航太郎、上村 丹唯佳、内川 裕佳、浦田 将嗣、大坪 達将、甲斐 歩美、加藤 里恵、金氏 竜哉、川嶋 梨月、児玉誠 二郎、坂崎 麻友、城島 由紀乃、瀬口 琴乃、大毛 詩織、高濱 杏香、谷川 奈々、田上 雄基、中村 明日香、西口 昂輝、野田 歩実、久宗 秀成、福住 陽太、古庄 麗奈、藤本 功大、本田 愛莉、

松岡 紗生、松本 一輝、本井 孝汰、芳崎 大地、大家 君香、川端 祐貴、小河 礼尚、嶋村 友佑、高尾 亜嘉利、中尾 有沙、永野 晃大、米原 睦貴、リュウルイナン、岩崎 貴夏矢、伊藤 絢香、小川 藍、金澤 里奈、川原 麻由、古谷 彩乃、堺 大介、里 くるみ、柴田 友華、島添 景子、園田 卓実、竹本 雛子、立山 結、豊岡 莉佳、長島 美沙、長藤 純矢、橋本 康隆、畑扶 綺子、濱田 兼士朗、宮内 康貴、森内 貴氏、山口 裕里香、阿部 いずみ、蛭子 祐土、青田 興明、富増 弥希、大政 凪、柴田 逸希、中川 智哉、吉村 花香、渡邊 大貴

宇土市境目団地

Uto-shi Sakai-me

鹿児島大学 柴田研・増留研

11月13日(日)、宇土市境目団地にて2回目となるワークショップを行いました。前回は、これからどのような活動を行っていくかの方針を決めるためにヒアリング調査を行いました。そこで、自治体が立ち上がったばかりでこれからお互いのことを知っていけたらという意見をもらい、表札作りのワークショップに至りました。また鹿児島県志布志市と宇土市の商工会議所からの炊き出しを行いたいという要望も頂き、ワークショップと並行して行いました。年配の方から子供まで14世帯30人に参加して頂きました。天候に恵まれたこともあり、予定よりも多くの住民の方々に参加して頂きました。最初は戸惑いながらも作成に取り掛かった住民の方々も表札が出来上がると嬉しそうに自宅の玄関に飾りに行く姿がとても印象的でした。

ワークショップを通して住民間の交流の場を作ることができたのではないかと思います。

準備としては、ベースとなる木材の選定や色の選定、どのように文字をプリントしていくかについて議論を重ねました。作業の容易さや製作過程での楽しさを考え、ベースの板の色は3色とし、ステンシルの文字を平仮名とローマ字、葉っぱなどの模様を準備しました。また、ペイント方法は速乾性や容易性を考え、スプレーを使用しました。志布志市と宇土市の商工会との連携も事前の連絡を通して円滑に行うことができました。



WSの様子



みんなのいえの表札も作りました



完成後に住民の方と



柴田 晃宏 | Akihiro SHIBATA
鹿児島大学 准教授 |
Kagoshima University, Assoc. Prof.



増留 麻紀子 | Makiko MASUDOME
鹿児島大学 助教 |
Kagoshima University, Assoc. Prof.

鹿児島大学 柴田・増留研究室

河崎 葉奈子、坂本 直哉、須永 達也、西垣 信良、竹島 光志郎、木村 拓、穂満 亮祐、明治 強照、坂井 一隆、高尾 奈緒、坂元 利伎、上村 佳子、中尾 有希、斎藤 雅敏、西山 知宏、森永 涼平、松田 寛敬、北之園 裕子

鹿児島大学 増留研 M2: 森永 涼平

[Column] 学生の声

私は意見交換会に参加させていただきました。そこでは、住民の方々の不安や戸惑いを感じました。これから私たちが活動していくことで、コミュニティを作っていく、仮設団地での生活を少しでもよいものしていきたいです。

宇城市当尾団地

Uki-shi Tounoo

鹿児島大学 鷹野研・根本 修平

宇城市当尾団地のみんなの家では、隔週火曜日に支え合いセンター主催でお茶会などのイベントが開催されています。そのお茶会に私たちも何度か参加し、住民の方と団地環境について意見交換を行いました。その中で「夜間の道が暗くて危ない」との意見があったので、私たちはそれを解消することに取り組むことにしました。そこで私たちは、当尾団地の道を昼は緑で、夜は光で彩る計画を考案しました。プランターの台座に蓄光塗料を塗り、光る台座を夜の道の目印にしようと考え、11月22日に試作品をいくつか持っていき、暗いところで光ることを説明すると、ぜひ設置してほしいとの意見を頂き、実施することになりました。

4月25日、花植えと私たちが考案した台座の設置のワークショップを実施しました。ワークショップの開催が平日の昼間ということで、協力して下さる住民の方の多くがお年寄りであると想定し、現地で行う作業が簡単な作業ですむように何度も試行錯誤を重ねて台座のデザインを練っていきました。当日は平日にもかかわらずたくさんの住民の方が参加してくださいました。みなさんそれぞれ好きなお花を選んで定植をし、すてきな彩りのプランターがたくさん出来上がりました。設置場所についても住民の方と話し合いを行いました。そこではプランターの蓄光に関するたくさんの質問があり、それを踏まえてここに置いてほしい、ここには置かない方がよいといった意見をたくさん言ってくれました。

今回の活動で当尾団地の方々の団地環境を良くしたいという思いを痛感しました。私たちももっと団地改善や町の早期復興に貢献していきたいと思っています。



WSの様子



WS後の集合写真



意見交換会の様子



鷹野 敦 | Atsushi TAKANO
鹿児島大学准教授 |
Kagoshima University, Assoc. Prof.

[Column] 学生の声

住民の方がとても元気で、お花も「きれいね! 」と喜んでいただき、一緒に楽しく植栽作業を行うことができて良かった。今後はまだ活動を行っていない団地にも出向き、活動を行ってきたい。

鹿児島大学 鷹野研 M1: 林田 真知



根本 修平 | Shuhei NEMOTO
第一工業大学 専任講師 |
Daiichi Institute of Technology, Instructor

鹿児島大学 鷹野研究室・根本 修平

林田 真知、島 俊典、平川 美憂、田村 健太郎、稲留 壮親、加藤 佳輝、吉原 佳代、赤松 麻由

熊本市城南町さんさん2丁目仮設団地

Kumamoto-shi Jonan-machi sansan 2chome

九州産業大学 矢作研・井手 健一郎

2月28日、熊本市城南町さんさん2丁目仮設団地に建てられる「プッシュ型みんなの家」の第1回意見交換会。さんさん2丁目仮設団地から少し離れた熊本市城南町舞原仮設団地規格型みんなの家で第1回意見交換会に参加しました。九州産業大学とrhythmdesignの方々とチームを組んで初めてのKASEI活動。さんさん2丁目仮設団地から少し離れた場所で行ったのもあって、来てくださるのか少々不安でしたが、さんさん2丁目仮設団地の住民の方々や地元の建築関係の会社員の方々も来て頂けました。始めにKASEI活動の目的を話し、さんさん2丁目仮設団地に建てられる「プッシュ型みんなの家」の配置の検討や模型を用いた提案の説明を行い、住民の方々と共に考えていきました。住民の方々からは、子供たちが勉強する場がほしい、お年寄りの方が多いので椅子を置いてほしいなどのご意見をお聞きすることができ、私たちが考えていた以上に盛り上がりました。さんさん2丁目仮設団地は、小規模の仮設団地で子供やお年寄りの方が多く、住民の方同士のコミュニティが強いと感じました。私たちは、「第1に住民の方々が何を求めているのか」ということを伺いたく、特徴の異なるいくつかの提案の模型を用い説明させて頂きました。地元の方々が利用されるため、私たちから提案を押し付けるのではなく、純粋に住民の方々にとって1番必要なことを伺うことを心がけました。この第1回意見交換会を通して、さんさん2丁目仮設団地の住民の方々や地元の建築関係の会社員の方々と和気あいあいと交流することができました。KASEI活動を通して、熊本の住民の方々と交流する機会が生まれていることが素敵なことだと身をもって感じました。今後も、さんさん2丁目仮設団地「プッシュ型みんなの家」を建てた後も住民の方々や地元の方々と交流していき、積極的に加勢(KASEI)していきたいと思っています。



説明している様子



住民の方々から意見を頂いている様子

[Column] 学生の声

さんさん2丁目仮設団地に建てられる「プッシュ型みんなの家」は、仮設の建物で2年間で壊されてしまいますが、その間のKASEIの活動で住民の方々と楽しく交流できることを楽しみにしています。

九州産業大学 矢作研B4: 塩真 光

[Column] 学生の声

熊本の方々と交流する機会がほとんどなかったのでとても勉強になりました。周りに桜の木や川が流れていて自然豊かなので、住民の方々と季節を楽しみながら活動できるだろうと楽しみにしています。

九州産業大学 矢作研B3: 小澤 成美

阿蘇市内牧団地

Aso-shi Uchinomaki

九州産業大学 矢作研・井手 健一郎

3月2日、熊本県阿蘇市内牧仮設団地に建てられる「プッシュ型みんなの家」の第1意見交換会。内牧仮設団地近くの集会場で行いました。内牧仮設団地の住民の方々や地元の建築会社の方々も参加してくださいました。rhythmdesignの方々とチームを組んで2回目のKASEI活動。始めにKASEI活動の目的を話し、内牧仮設団地に建てられる「プッシュ型みんなの家」の配置の検討や模型を使い提案の説明を行い、住民の方々と共に考えていきました。住民の方々からは、キッチンが広く、大きい畳の場がほしいなど積極的にご意見をお聞きすることができ、住民の方々が内牧仮設団地に建てられる「プッシュ型みんなの家」を必要としていることをすごく感じました。内牧仮設団地に建てられる「プッシュ型みんなの家」は、常設で仮設団地がなくなった後も残り続けるので、住民の方々に長く愛されるものを考えています。私たちは、「第1に住民の方々が何を求めているのか」ということを伺いたく、特徴の異なるいくつかの提案の模型を用い説明させて頂きました。地元の方々が利用されるため、私たちから提案を押し付けるのではなく、純粋に住民の方々にとって1番必要なことを伺うことを心がけました。この第1回意見交換会を通して、内牧仮設団地の住民の方々や地元の建築関係の会社員の方々と終始楽しく交流することができました。KASEI活動を通して、熊本の住民の方々と交流する機会が生まれていることが素敵なことだと身をもって感じました。今後も、内牧仮設団地「プッシュ型みんなの家」を建てた後も住民の方々や地元の方々と交流していき、積極的に加勢(KASEI)していきたいと思っています。



説明している様子



住民の方々から意見を頂いている様子



矢作 昌生 | Masao YAHAGI
九州産業大学 准教授 |
Kyushu Sangyo University, Assoc. Prof.



井手 健一郎 | Kenichiro IDE
リズムデザイン | rhythmdesign

九州産業大学 矢作研究室・井手健一郎

内野 友貴、川口 真愛、川野 雅規、塩真 光、志賀 織晃、下津 皓平、長家 徹、上原 諒太郎、小澤 成美、黒岩 香帆、戸上 夏希、平安 茜音、村上 優太、秦 拓也、脇 隼人、松石 和也、清水 史子、田所 佑哉、山本 彩葉

益城町小池島田団地

Mashiki-machi Oikeshimada

崇城大学 西郷研・秋元研・中園研

5月27日、6月3日に西郷研、秋元研をあげてKASEI活動を行いました。内容としては、住民の方々からの要望を受け、今回は梅雨が近いということで傘立てと、収納の問題解決のためにハンガー掛けを作ることにしました。私たちは、学生1人が住民の方2人ほどに付き、サポートしていく体制をとり、作成しました。午前・午後の部の2回に分け、2日で約40世帯分ほど完成させることができました。(計4回)

今回のイベントは、作品のサンプル作り、自治会長の方からの確認、材料の発注の過程を経て実現することができました。

傘立ては、傘が5、6本ほど掛けられるもので、屋外に置くことを想定して設計しました。ハンガー掛けは、長押のようなものにフックをつけて、そこにハンガーを掛けることを想定しました。

初回は、不慣れなところもありましたが、会話も弾み、みなさんの満足のいく作品を作ることができたと考えています。そして何とんでも予想していた以上に楽しい活動となり、大変嬉しく感じています。2回目は、初回の反省を生かし、人数も多かったものの、円滑に作業を進められました。こちらも初回と負けず劣らず、和気藹々とした雰囲気での交流をできたと思います。収納スペースの問題については、住民の方々の共通の悩みであったため今回の活動は大成功であったと思います。

また、活動の中で、震災当時のことや現在の状況のお話を聞かせて頂いたり、お宅の中を拝見したり、建築学科の学生としてこの上ない経験をする事ができました。作成した傘立てとハンガー掛けが、これからの住民のみなさんの生活の中で役立つことを切に願うばかりです。

[Column] 学生の声

住民の方々の生の声を聞くこともでき、我々にとっても素晴らしい経験となりました。今後も様々な形で支援を続けていきたいと考えているので、今回の活動で得た知識や反省を次回、十二分に生かしていきたいです。

崇城大学 西郷研 B4: 西田 直生

[Column] 学生の声

作ったものをお渡しするのではなく共に制作する中で、収納スペースに問題があることを再確認する事ができました。また、作品に対してとても満足していただけたため私たちの加勢が皆様のお役に立てればと思えました。

崇城大学 西郷研 B4: 赤尾 光彦



作業風景



集合写真



西郷 正浩 | Masahiro SAIGO
崇城大学 准教授 | Sojo University, Assoc. Prof.



秋元 一秀 | Kazuhide AKIMOTO
崇城大学 教授 | Sojo University, Prof.



中園 哲也 | Tetsuya NAKAZONO
崇城大学 准教授 | Sojo University, Assoc. Prof.

崇城大学 秋元、西郷、中園研究室・近畿大学 益田研究室
鶴 入りな、赤尾 光彦、坂本 涼太、園田 彩夏、西田 直生、吉村 翔、立花 和弥

美里町くすのき平団地

Misato-machi Kusunoki-daira

大阪工業大学 前田研

2016年の12月末に初めてくすのき平団地に赴きました。くすのき平団地は被災から半年以上経過してから「みんなの家」の計画が始まりました。現地では住民の方から様々な意見や「みんなの家」を使って行きたいことなどを伺うことができ、「みんなの家」の建設への期待が高い印象を受けました。

1月14日に住民の方に向けて初めての意見交換会を行いました。前回うかがった際に頂いた住民の方々の意見や住民の方と接し、感じたことを組み込んだ図面や模型を用いて住民の方に説明し、意見交換を行いました。前回訪れた際よりも具体的に住民の方から「みんなの家」の使い方の意見を頂き、「みんなの家」に対する認識が深まってきたように感じました。その後も熊本に訪れる度、団地に足を運び住民の方の要望を聞くようにしてきました。しかしながら、大阪より支援活動を行っているため、他大学に比べると団地に訪問する機会はわずかでした。そのため、1回の訪問でできるだけ多くの住民の方の意見や周囲の環境の情報を取り込み、「みんなの家」の設計や使い方の提案を行うことで5月末に着工しました。

「みんなの家」着工に伴い、今後のKASEI活動として6月中旬にくすのき平団地にて屋外に設置する机とイスの製作を行います。屋外に設置するイスは住民の方が団地内において自由に持ち運べるものとし、お気に入りの場所の発見や団地内コミュニティの形成につながることを期待しています。

8月にも学生を中心として住民の方と一緒に「みんなの家」のデッキ張りなどのワークショップを予定しています。住民の方が「みんなの家」建設に関わることで、自分たちのものという意識を持ってもらい、より主体的な使い方をしてもらえるような支援活動を行っていきます。



1月13日意見交換会



2月13日施工者協議



くすのき平みんなの家イメージ



前田 茂樹 | Shigeki MAEDA
大阪工業大学 准教授 |
Osaka Institute of Technology, Assoc. Prof.

大阪工業大学 前田研究室
東野 健太、林 雅大、新井 悠太、隈元 峻太

[Column] 学生の声

震災から2年目に入りましたが、くすのき平団地でのKASEI活動についてはこれから本格的に開始となります。他に先行して活動の行われた団地を参考に新たな加勢活動を展開していきたいと考えています。

大阪工業大学 前田研 M2: 東野 健太

御船町玉虫・甘木団地

Mifune-machi Tamamushi, Amagi

大阪市立大学 宮本研・横山研

12月25日、初めて現地を視察。その後、アートポリスの一環であるみんなの家の設計のスタディーに学生も参加しながら、KASEI活動として何ができるのかを考え始める。団地の方々との打ち合わせの過程で、当初、想定していた場所から変更となる。変更後、甘木団地におけるみんなの家の敷地が二項道路に面しているため、既存ブロック塀を壊さなければならず、外構が解体後そのままになってしまうことが判明する。そこで、甘木団地の敷地内の被災し解体される民家の廃材を用いて、KASEI活動として何かできないかと考え始めた。

2月13日、みんなの家設計予定の敷地の実測と甘木団地の解体予定の民家を視察。民家の所有者の方と相談しながら廃材として瓦や基礎石、大黒柱などの木材の再利用を検討し始める。また、実測の結果、道路からみんなの家の敷地までかなりのレベル差があることがわかった。そういったことから、かつてそこに建っていた民家の歴史を継承しつつ、レベル差を解消できる瓦のこぼ立て階段や基礎石の擁壁づくりをKASEI活動としてできないか検討し始める。デザインだけでなく、学生の手で行える施工手順、道具の調達に至るまで様々なことを考慮し、繰り返し試作した。

また、KASEI活動として、甘木団地・玉虫団地共にみんなの家の壁の左官しあげを提案。甘木団地では、道路を挟んで向かいに古くから建つ長安寺とも相性のいい藍色の掻き落とし、玉虫団地では、「玉虫」という地名の由来ともなった平家の玉虫御前のお話しの登場する朱色の扇の色にちなんで、朱色の磨き壁（大津磨き）を予定している。団地の方々に親んでもらえるような場所作りができるよう、これからも活動を続けていきたい。



宮本 佳明 | Katsuhiro MIYAMOTO
大阪市立大学 教授 | Osaka city University, Prof.

[Column] 学生の声

現在、みんなの家の設計から使われるまでのプロセスに関わるという貴重な経験をさせていただいている。今後はものづくりと並行して、ことづくりにについても考えていきたい。

大阪市立大学 宮本研 M1: 重光 理沙



みんなの家外観_玉虫団地



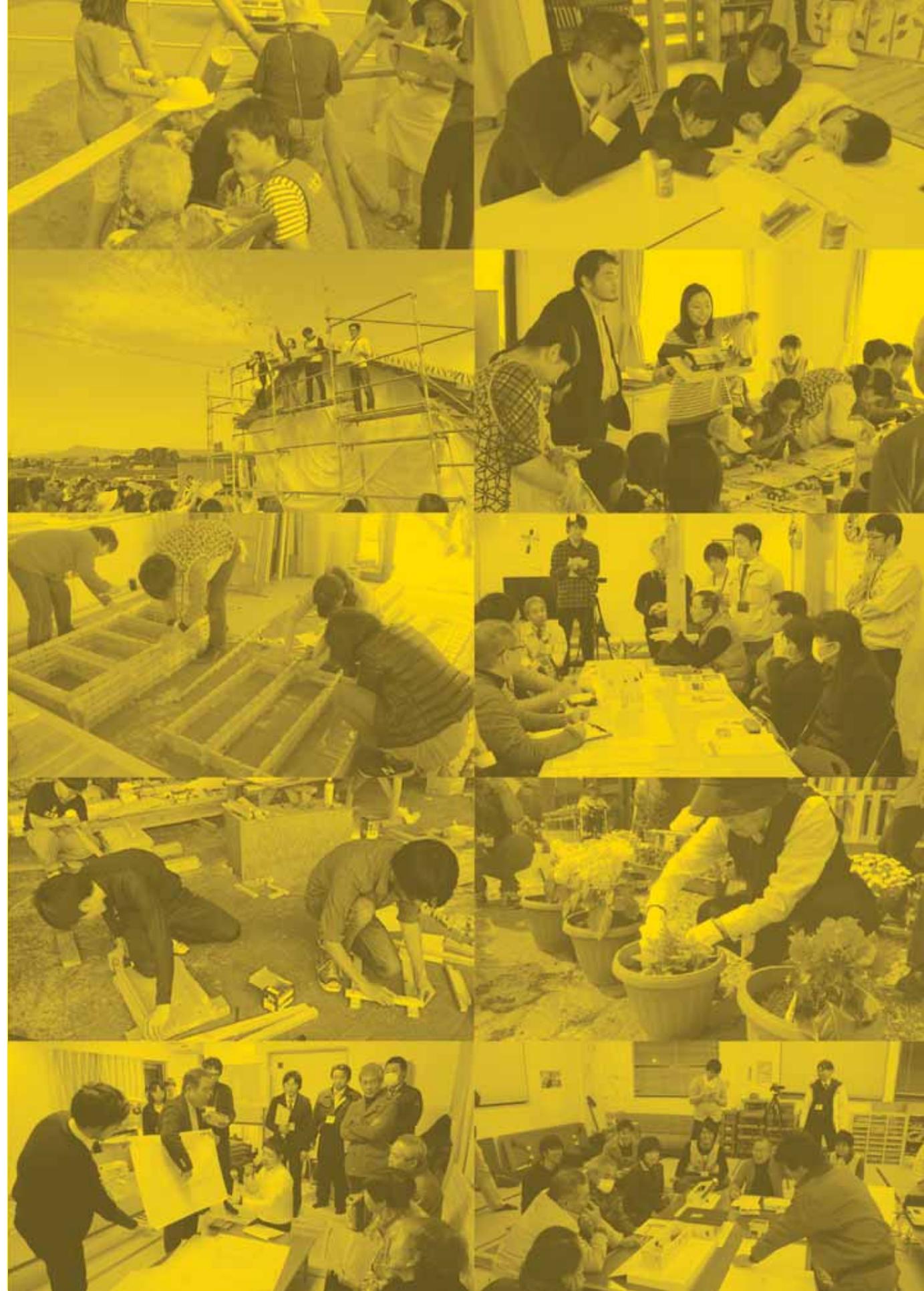
解体予定民家の視察の様子



横山 俊祐 | Shunsuke YOKOYAMA
大阪市立大学 教授 | Osaka city University, Prof.

大阪市立大学 宮本・横山研究室

鍛冶田 祥尚、川口 昂史、重光 理沙、中嶋 純一、菟口 祐美子、中林 顕斗、白松 楠、野田 裕介、土居 和樹、富永 慧、海本 芳希、中野 隆太



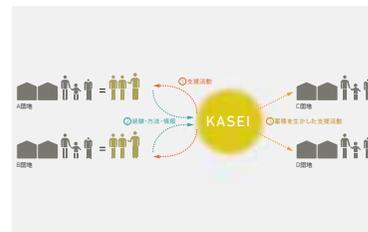
ネットワーク型活動体としての KASEI の試み

菊地 成朋 Shigetomo KIKUCHI

九州大学大学院 人間環境学研究院 都市・建築学部門 教授



ソフト・ハード両面の支援



連携と情報の共有



様々な主体との協力体制

支援のかたちを考える

熊本地震が起こった時、当然のように「九州にいる私たちに何が出来るか」を考えた。そして、震災直後から、支援について末廣香織ら同僚と話し始めた。熊本アートポリスのアドバイザーを務める末廣は熊本県と繋がりがあり、県が供給する仮設住宅団地への支援を打診された。そこで九州の建築系大学教員に呼びかけて始まったのが、のちにKASEIと呼ばれるようになる支援プロジェクトである。

熊本地震は、東日本大震災から5年を経たタイミングで起きた。東日本での支援のあり方を踏まえ、そこから何を学び、それをどう活かすのか、そういうことが考えられる状況にあった。

仮設住宅には被災者が決して短くはない期間を過ごすのであり、仮設とはいえ、その居住環境が軽視できないことは、東日本以降は広く認識されるようになってきている。しかし、制度上の制約や短期間のうちに大量に建設しなければならないことから、画一的な長屋が等間隔に整然と並んだ味気ないものになってしまうのが、これまでの仮設住宅の常だった。

今回は、それとは異なる仮設住宅建設が試みられた。当初作成された設計案は従来通りの規則的な平行配置だったが、アートポリス・アドバイザーの桂英昭らが1つ1つ見直して設計変更を行なった。住棟間隔を広げて外部空間に余裕をもたせる、長かった住棟を分割しその隙間をつなげて小径とする、各団地に集会施設「みんなの家」を設け配置上の拠点に置く、集中型の大型駐車場を分割して配置するなどである。東日本でも注目される仮設住宅の提案があったが、それらは個別事例にとどまっていた。今回は、ほぼすべての団地において、そのような対応が施されており、その点が画期的である。そのことから、この取り組みは「熊本型デフォルト」と名付けられた。

そのような意欲的な仮設住宅供給を受けて、KASEIが居住環境の支援に取り組むことになった。ただ、すぐには行動せず、最初の1、2ヶ月はコンセプトワークに使った。それは、KASEIの取り組みの目標を、個々の活動が評価されることではなく、活動の総体を最大限に有効化することに置こうと考えたからである。とはいえ、居住者に寄り添う住環境支援を全団地についてカバーすることは、当初想定された50団地2,000戸(最終的には110団地4,303戸が建設された)に対し

てもマンパワー的に到底不可能であった。

もともと行政機関ではないので、シビル・ミニマムの対応がわれわれの役割ではない。そう考えて、呼びかけに応じて集まったメンバーで可能な範囲の団地を担当して活動を展開することにした。

活動のネットワークをつくる

大学が行う支援活動なら、研究室が主体となるほうが動きやすい。そこで、KASEIの活動は研究室を基本単位として行うこととし、仮設団地ごとに担当研究室を割り当てた。活動は、居住者自身による住環境改善の活動を支援することで、その内容は家具づくりなどのハードからコミュニティ形成といったソフトにまたがる。

東日本でもその前の中越地震でも同様の支援が数多く実践されたが、それらは単独で行われることが多かった。そのため、メディアで取り上げられて有名になった地区への活動の集中や、必ずしも被災者が求めない支援活動なども発生したことが指摘されている。KASEIでは、各団地での活動をネットワークでつなぐことによって、活動の重複や偏在の無駄を減らし、方法やプロセスを参考にし合っただけの支援の内容を改善していくことを目指した。

そのツールとして採用したのがFacebookである。ソーシャルメディアの社会的活用については、東日本大震災の被災直後、テレビや電話が繋がらない時点から安否確認や情報収集に使われたことが言われている。また、近年は公共セクターが情報発信ツールとして運用するケースも増えている。KASEIでは、Facebookを使って情報の共有をはかることにした。1つの活動が行われるたびに「活動日誌」をつけ、それをFacebookの内部限定グループページにアップすることを義務づけた。その後、グループ内のネットワークは、所属の異なる学生同士が直接連絡し合うまでになっている。あわせて公開用のページも開設し、活動を対外的に発信した。さらに、ホームページでも活動をよりまとめた形で提示している。これらは活動の紹介とともに、KASEI以外の組織との連携も想定してのことである。

ただ、Facebookのような情報媒体だけでは、活動の実情を知るには限界がある。連携の効果を上げるには、直接、顔を合わせて一体感を生むことも大切である。

そこで、実行委員会を隔月のペースで開催し、九州各地に

分散しているメンバーが一堂に会する機会を設けた。

実行委員会では、実際の活動について報告し合うとともに、熊本県や各自治体の担当者、住民代表、他のボランティア団体などを招いて、活動や連携のあり方について意見交換をしている。また、立ち上げ期のコアメンバーが運営委員会を組織し、震災直後は毎週、その後は隔週のペースで集まり、KASEIの運営について話し合っている。以上のような組織体制の大枠は、初期のコンセプトワークで形づくられたものである。

今後につなげる

KASEIでは、今回の取り組みを、今後発生するであろう災害に対しても何らかの意味を持つものにしたと考えている。そのためには記録を残すことが重要で、「活動日誌」やAnnual reportの作成はそのための作業でもある。実際には現地の活動だけで手一杯なはずで、「活動日誌」の作成は担当者にとって負担かもしれない。それでもそれを課するのは、記録を残すことがメンバー内での情報共有にとどまらず、今後の災害支援にバトンを渡すことにもなるからである。そういう意味では、活動が一段落した時点でKASEIの取り組みを客観的に振り返って、まとめておくことも必要だろう。

また、「九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト」という名称が示すように、KASEIの活動主体は「学生」である。学びが本分である学生にとって、KASEIの活動は被災者への支援であると同時に、学生自身の学びにもなってほしいと思う。普段の学習、たとえば設計演習などとKASEIの活動の違いは、圧倒的なリアリティだろう。教員も正解を知っているわけではない。みんなで協力して解答をさがすことになる。これからの社会では、むしろそういうスキルこそ必要になってくる。知識や情報はスマホですぐに手に入る時代である。これから必要なのは考える力であり、自分以外の人々と協力しあう知恵だろう。KASEIはまさにそういう活動である。この活動を通じての学生の学びも、われわれが未来へつなぐバトンのひとつである。

KASEIの活動は、支援の規模としてはそれほど大きなものではないが、これまでにないネットワーク型支援の試行として、今後につながるものであると考えている。

仮設団地が生きられる時間

四ヶ所 高志 Takashi SHIKASHO

福岡大学 工学部 建築学科 助教

仮設住宅へ入居する被災者の生活の場を少しでも安らぎのある環境にしたいということで、KASEIプロジェクトが組織されたのは2016年の7月頭である。ちょうど甲佐町に最初の仮設団地が完成し、まさに団地への入居が開始されようとする頃であった。それから約1年、仮設団地が順次整備されるなかで、各大学・研究室は担当団地での支援活動に“モノ(物)づくり”と“コト(出来事)づくり”の2つの側面から取り組んできた。私たち福岡大学は、九州大学、九州工業大学とともに南阿蘇村、大津町の仮設団地を担当してきた。KASEIは学生が主体の組織であるため、各大学の授業スケジュールなどが支援活動に影響する。当初は、大学間のスケジュールの違いによって足並みが揃わず、KASEIへの取組みに支障をきたすのでは無いかと心配していたが、むしろ互いのスケジュールを補い合うことで支援活動を定期的に行うことができた。また福岡県内の合同チームであったことは、顔を合わせてのミーティングや活動準備を行うことが容易であり、被災地の外からの支援を持続する上で有効だった。3大学合同チームでの具体的な活動内容別頁に譲り、ここではKASEIの活動を通して考えたことについて記したい。

仮設団地での生活風景

南阿蘇村、大津町の仮設団地を初めて訪れたのは、各団地のコミュニティの中心であり、KASEIの活動の主な対象となる「みんなの家」が竣工しようとしていた8月上旬であった。被災した人たちに必要なモノ・コトについて見当がつかなかったし、入居開始から2ヶ月近くが経過し仮設での生活も落ち着いてきた頃ではないかと思い、仮設団地の様子をみにいった。2つの町村では、あわせて4つの仮設団地(長陽運動公園団地、岩坂団地、室団地、南出口団地)で「みんなの家」がつけられていた。これらの団地を順に巡ったのだが、日中はどの団地も静まり返っていて、生活風景どころか住民の姿を見かけることもほとんどなかった。偶然会うことのできた住民に話を聞くと、罹災した家の瓦礫の撤去や家財の搬出のために、大半の住民はももとの住まい(あるいは住まいがあった土地)に帰っているという。また家の片付け以外にも、畑仕事をするために帰っていたり、団地内で飼育が禁じられているベットの面倒を見にいつている人も多いということだった。日中ガラガラだった団地内の駐車場は、日が暮れるとともに車で一斉に埋まり始める。一日働きづめの住民たちは、夜にな

ると仮設にやってきて、後は食事をとり、入浴し、寝るだけといった様子が確認できただけだった。

被災した人々が生きる1日の中で、仮設住宅は雨露をしのぐ、寝食を行うといった家として最低限の機能の場でしかなかった。団地への入居から間もない頃の風景は、「果たしてどうやってKASEIとしての活動を行なっていけば良いのだろうか」という想いととも強く記憶されている。それは言い換えれば、「仮設住宅という建物はどうしたら被災した人々にとっての“家”になり得るだろうか」ということであった。

身体の一部としての“家”

たとえ一時的であっても、仮設住宅がそこに住まう人々にとっての家になるには、人々が被害を受けた家に帰る理由を考える必要があるように思われた。彼らが家に帰る理由、それはもちろん、片付けをしなければいけない、生活のために畑仕事をしなければいけない、などといった具体的な目的以上の理由があるのではないか。

家を構成している床や壁、家に置かれた家具や道具は、生きる営みの中で住まい手によって使いやすいうように整えられ、その位置や形が住まい手の振る舞いにあわせて落ち着いていく。そうして繰り返し使われることで、家や家に置かれたモノたちには個人が生きてきた時間が刻まれ、同時にそれらを通して経験された周囲に暮らす人たちとのつながりや、周辺に広がる田畑や山々と一体的にある風景の記憶も刻まれている。彼らが家に帰る理由は、そうした家に蓄積されたモノや人や環境とのネットワークに触れ、震災によって空間的にも時間的にも切断されてしまった自らが生きてきた記憶を辿り、生きる営みを回復するためといえるのではないか。家に住まうこと(言い換えれば、日々の生活の中で繰り返し家を使うこと)で培われてきた家と住まい手の身体との結びつきは習慣化されていて、おそらく自らの身体の延長・一部として感じられるほどに家と身体は同化しているのだろう。そう考えると、仮設団地が豊かな生活環境となるためには、徹底的に団地が使われ、住民たちの生活の痕跡が至るところに蓄積され、団地が身体化されていく必要があるように感じられた。

KASEIによる“モノづくり”と“コトづくり”

熊本地震では、従来の計画と比較して、供給の効率性よりも生活環境への配慮が目指され「熊本型D(デフォルト)」による団

地がつけられてきた。しかしいくら十分に配慮されようとも、住まう人々によって十分に時間をかけて住まわれないことには“家”にはなり得ない。KASEIの活動は、最低限の機能しかもたない仮設住宅・団地に不足した家具や外構などを整備し、住まうための環境を物理的に改善していくことであるが、その本質は、単に不足する“モノ”を補うことではない。それは、モノをつくることを通して仮設団地を使う(=住まう)きっかけをつくることであり、使うこと(=住まうこと)を通して仮設住宅が家として経験され、自らの身体の一部として生きられることを促すことといえるだろう。だからKASEIが行うモノづくり”では、学生が一時的にものをつくり、提供するのではなく、何が必要であるかについて意見交換会を催し、団地を使いこなす(=住みこなす)ことについて住民と共に考えてきた。実際に家具や外構をつくる際もWSを企画し、住民とともにものづくりを行うだけでなく、できたものを住民とともに使うイベント(コト)を仕掛け、“モノづくり”をコト化し、つくる行為を通して団地が使われることを促してきた。つまりKASEIの活動の本質は、住民が徹底的に仮設団地を使い、仮設団地に住民の生きた時間が重ねられることの支援にあり、“計画”という枠組みに欠ける“経験”という枠組みから仮設団地の整備に取り組むことなのである。

さて、こうした枠組みで取り組んできた“モノづくり”と“コトづくり”は、この報告書にある通り1年間で74件に及ぶ。KASEIだけでなく、様々なボランティア団体、行政支援の拠点として利用された経験は主に、各団地の「みんなの家」に記憶され、規格型・本格型の違いを問わず「みんなの家」のバリエーションとして現れている。そのバリエーションは仮設団地が生きられた結果であり、生きる行為としての人の振る舞いの多様性である。

今後応急的な住まいから恒久的な住まいへと復旧・復興のフェーズは移行していき、仮設団地の集約化など、団地を巡る状況は刻々と変化してくだらう。そうした中でもKASEIを持続し、団地内での環境の変化、生活へのニーズの変化に合わせて「みんなの家」を中心に団地をカスタマイズし続けていく必要がある。また、熊本地震における仮設団地が住まわれた時間の現れである「みんなの家」の使われ方を記録し、自然災害に対する復興への知として蓄積することで、「みんなの家」が被災者個人の中に生きられるだけでなく、現代の災害復興学的な時間の中にも生きられるよう努めなければならないだろう。

仮設団地住民が主体的に取り組む環境整備

佐藤 哲 Satoshi SATO

熊本県立大学 環境共生学部 居住環境学科 准教授



テクノ住民との広場整備



完成したテクノ団地広場



テクノ子供会でのワークショップ



テクノ子供会でのワークショップ

2016年4月、熊本は震度7の地震に2度見舞われ、多くの方が住まいを失った。KASEIプロジェクトは7月に発足し、これまで多くの方々に、熊本の仮設住宅支援にかかわっていただいた。熊本に住むものとして、大変ありがたく、感謝しております。

私自身もKASEIでは、県内最大516世帯の益城町テクノ仮設団地(以下:テクノ)を担当している。2016年9月より、本格的に活動を開始し、様々な支援を行ってきた。「とても精力的に活動していますね」とよく言われますが、私が勤務する熊本県立大学からテクノまでは、車で20分程度の距離なので当たり前なのだと思う。むしろ、遠方から沢山の機材や部材を抱え、熊本に来て活動されている他大学の活動に敬意を感じます。

KASEIの1年目の活動をまとめる報告書を作成するにあたり、計画系の視点で論考を書いてほしいという依頼を受けた。しかし、私自身、他の団地に行ったことがあまりなく、現時点で熊本の仮設団地について論じるほど知見を得ているわけではない。しかし、被災地に最も近い大学の立地を生かし、月1で開催されるテクノ仮設団地自治会にも、学生を伴って毎回参加させてもらっている。この自治会での話題や、住民とともに活動した内容を整理し、震災から一年が過ぎた仮設住宅団地で、どのような住民活動が行われているのかを報告したい。

テクノは県内最大の仮設団地で、A~Fの6つの工区に分かれており、自治会長も6人いる。また、被災した方々が、生活再建に向けて安心した日常生活を送れるよう、見守りや健康・生活支援、地域交流の促進などの総合的な支援を行う「地域支え合いセンター」が仮設団地内に事務所を構える数少ない事例であり、テクノでは全国訪問ボランティアの会「キャンパス熊本」が益城町社会福祉協議会から委託を受け、活動を行っている。さらに、町の中心から遠いテクノには、仮設商店街「笑」店街も設置されている。毎月第一木曜日にD工区集会所(規格型60m²)で実施される自治会には、前述のメンバーがすべて集まり、情報共有や今後の活動方針について話し合いを行っている。

テクノには本格型みんなの家1棟、規格型集会所(60m²)6棟、規格型談話室(40m²)4棟の計11棟のみんなの家が整備されているが、住民から「みんなの家」と呼ばれているのは本格型のみで、それ以外はA工区集会所、C工区談話室と呼

ばれている。自治会は毎回D工区集会所で行われている。

これはテクノ団地発足当初からD工区住民のまとまりが強く、団地内で主導的な役割を果たしてきたからだといえる。D工区住民は、震災発生後、益城町中央小学校を避難所として利用していた住民が多く、避難所で形成されたコミュニティ、使用していた食器や家電製品、支援物資をそっくりそのままD工区集会所に持ち込んでおり、「益城だいきプロジェクト・きままに」というNPO法人も設立している。法人格を有する住民組織があることで、住民が被災地支援の補助金事業に積極的に応募し、仮設住宅団地の環境改善に、住民が主体的に取り組んでいる事例と言える。

自治会はキャンパス熊本からの現状報告から始まる。テクノのみんなの家はキャンパスが鍵を管理しており、ボランティア等の受け入れ窓口にもなっている。各自治会長を通したイベントの周知、チラシを自治会長自らが各戸に配布することも多い。騒音問題や住民間のトラブル、集会所や談話室のトイレの上に子供が昇って危ない、談話室のテレビを子供が壊したなど様々なことが報告され、対策が話し合われる。その中から自治会が主体となった特徴的な取り組みを以下に示す。

独居老人、日中独居の方の見守りと孤独死対策

2017年4月4日、益城町惣領仮設団地において、熊本地震で初の孤独死が確認され、その1日後にテクノでは4月の自治会が開催された。参加者全員で「テクノでは孤独死を絶対に出さない」ために何をすべきかが話し合われた。テクノでも2017年3月に1週間寝込んでいた住民が発見され、救急車で病院に搬送される事例が発生しており、独居老人、日中独居の方々が自治会が把握すること、高齢者が積極的に外に出るようなイベントが提案された。熊本の仮設住宅は3世帯で一つの棟になっており、ある自治会長の「全体を把握するのは難しいが、住民が自分の棟の残り2世帯を日常的に気にかけていれば孤独死は防げるのに…」という言葉が印象的であった。

子供の遊び場と親同士の交流

「いつ事故が起こってもおかしくない」。仮設団地内の車道や駐車場で遊ぶ子供たちを見た大人たちは危機感を抱いていた。広いテクノではあるが、自転車や2輪のローラーボードで安全に遊ぶ場所はほとんどない。この課題に対し

て、2017年1月の自治会に飛び入りで参加したD工区の住民がいた。「テクノの脇に、草を刈り、整地すれば広場として活用できる土地がある」「自分は建設業を営んでおり、重機と山砂を用意してもらえれば自分たちで整備する」。その後、テクノ代表自治会長が土地の所有者である県と「おおきく土地改良区」に掛け合い、2017年4月には「ダム湖の見えるみんなの広場」が完成した。

また、2017年5月にはテクノ仮設団地に「子供会」が発足した。益城町の様々な地区から入居している住民は、通っていた学校区が異なれば、子供同士も、親同士もほとんど交流がなかった。親同士の交流イベントを、自治会、キャンパスが企画したことがきっかけとなり、同じ世代の子供を持つ親が、校区の枠を超え意見を出し合い、5月には本格型みんなの家の東側に砂場も完成した。E工区の談話室を今後子供専用で整備する企画も立ち上がり、管理や運営を含め、今後主体的に住民がかかわることになるであろう。

災害復興公営住宅に対する思い

2017年5月に、テクノ自治会長の数名が、宮城県の震災復興公営住宅を見学に行き、6月の自治会でその報告があった。参加の呼びかけは2月の自治会でなされたが、その際ある自治会長から「自分は自宅再建ができれば仮設を離れる」「いつまで自治会長をできるのか分からない」「自分が見学に行っても意味がないのではないか」という発言があった。実際、見学に行った自治会長全員が災害復興公営住宅に入居する(できる)わけではない。しかし、現地で建物や住民の意見を見聞きし、益城町の復興のために、行政に積極的に提言を行いたいという意見が変わっていた。テクノではどれくらい住民が災害復興公営住宅に入居したいと思っているのか、どんな住宅を望んでいるのかを把握したいということで、その調査をKASEIで請け負うことになった。

テクノでは住民が主体となり活動を行っている。様々な人材がいることは、大規模仮設団地の特徴だといえる。仮設団地開設当初は、「家の前に草が生えているので何とかしてほしい」と役所に電話する住民もいたそうだが、今は多くの住民が、自ら居住地の環境整備に積極的に取り組んでいる。もちろん歯車がかみ合わず、うまく進んでいないことも多い。そのような場面をKASEIの学生がフォローし、住民と協働でよりよい環境整備につなげていけることを期待したい。

復興支援活動の多様性と その実践

田中 智之 Tomoyuki TANAKA

熊本大学大学院 先端科学研究部 准教授



写真1 本震後の研究室



写真2 紙管間仕切の設置活動



写真3 御船町東小坂仮設団地コミュニティスペース



写真4 コミュニティスペースでの意見交換会

発災後の現場

平成28年4月14日21時26分の前震、そして4月16日1時25分の本震をはじめとする4000回を超える有感地震による「平成28年熊本地震」を、私たちは熊本で被災した。前震は多くの学生と大学で、そして本震は深夜だったこともありそれぞれの居住地で被災し、各々が付近の避難所に避難。情報環境が制限されるなかの安否確認、今後の生活環境をどうするかなど、度重なる余震のなか、不安や恐怖に包まれたまま朝を迎えた。

それから数日はインフラ復旧がままならず、電気は早々に回復したものの水道ガスが止まったままであり、コンビニや店舗も閉店、大学も休講となるなか、不自由な生活が続いた。

小生は前震後、本震後共に家族で校区内の小学校に避難し、本震後は校庭の青空避難所で朝を迎え、救援物資も殆ど届かない状況から一度福岡に避難し、4月18日に子供を東京の祖父母宅に送った後、熊本へ戻った。その足で大学へ行ったが、建築学科のある工学部1号館が甚大な損傷を受けていたため入館禁止となり(写真1)他学科の部屋を借りて仮設教員室が設けられ、同じく1号館に入居していた社会環境工学科、そして同じくダメージを受けた研究棟Iから避難してきたマテリアル工学科と大部屋をシェアすることとなった。

この頃はまず学生の安否確認の整理、今後の対応をいかに学生に伝えるか、工学部1号館の状況確認、各教員室・研究室からの重要物資の移設等が行われていた。幸い本学黒髪キャンパスでは水は出ていたので、執務環境としては何とか成立していた。そして大学で水を汲み、自宅へ毎日持ち帰る生活が続いた。時期は前後するが、前震の翌日に研究室の散乱状態を片付けていた4月15日の昼頃、坂茂建築設計の田所氏よりメールを受け取った。内容は、早速避難所での間仕切り支援に動き始めたく、状況把握と現地協力を依頼できないか。

この時点ではまだ被害状況や避難所の動き等が全くわからなかったため、ひとまず熊本市の職員を紹介し、行政に連絡をとってもらった。それに対し熊本市からはまだライフラインの復旧が最優先で小学校も休校であるので、もう少し待つて欲しい旨の返信がなされた。その後坂事務所より防災協定を結んでいる大分県が熊本県に協力するかたちで南阿蘇村から間仕切り設置を開始するので、学生代表を決め

て欲しいと連絡が来る。そして4月20日に田中研の学生代表2名(院生:福岡海仁、学部:下田宇大)を決め、4月23日に坂茂氏をはじめVAN(ボランタリー・アーキテクト・ネットワーク)のメンバーと対面。そして4月24日の帯山西小学校から連日連夜に及ぶ避難所の間仕切り設置がスタートした(写真2)このころ幾度も九州大学の末廣香織先生から連絡をいただいております、状況の確認と、出来る事があつたら要望して欲しいとの進言をいただく。そして間仕切り設置活動にも九大をはじめ、多くの周辺大学や企業の方々がサポートして下さるようになった。

間仕切から仮設住宅・コミュニティスペースへ

5月末頃になると避難所間仕切り設置がひと段落し(約1ヶ月で37避難所に約2,000ユニット)、避難所の集約化、仮設住宅の設置へと移行していく。そんななか6月12日に佐賀大学の平瀬有人先生から「くまもとアートポリス関連で『熊本地震・九州建築系大学仮設住環境向上支援チーム』を立ち上げ仮設住宅の住環境支援を考えている、できる範囲で参加してほしい」との連絡をいただく。後から思えば以前末廣先生と話しているなかで、「熊本組は復旧で大変だろうから、周辺の建築系大学で連携して何かできないか考えている」ということをお聞きし、それがこの動きに繋がっていったと思われる。こちらは間仕切り設置、仮設住宅の提案をVANと行っている最中ということもあり、どのようなかたちで参加できるか不明ではあったが、ひとまず参加させてもらうことになった。そして7月12日の第1回実行委員会に出席し、KASEIに参加するかたちで復旧・復興活動を継続していく。

具体的には坂茂氏が木質系パネル工法の仮設住宅を熊本県および熊本市に提案し、そのモックアップ製作を学生や地元設計事務所の若手有志らが協力した。本研究室はその仮設住宅間のコミュニティスペースの提案を作成し、併せて県・市に提案。その後県が県内市町村にその提案を紹介し、御船町がその提案に興味を示していることで説明して欲しいとの連絡を受けた。6月20日に御船町と協議し、追加で検討している東小坂仮設団地に、新たな木質系の住宅を検討しているので提案をまとめて欲しいとの要請を受ける。そして坂事務所が仮設住宅案を作成し、コストや施工業者の面で幾多のハードルがあつたものの何とか乗り越え、ようやく8月に着工し同月末に完成。仮設住宅の現場が進行する最中にコミュニティスペースの提案もまとめ、9月

に住民説明を実施、こちらも駐車場の問題やコスト、施工業者の難問を何とかクリアし、10月下旬に着工、11月13日に上棟式、12月上旬の完成を経て12月18日にオープニングイベントを実施した(写真3)。コミュニティスペースの建築概要は以下の通りである。

「御船町東小坂団地は僅か10世帯の小さな団地であるが、地域の縁側のような場所が必要だろうと考えコミュニティスペースを提案した。2棟の仮設住宅をつなぐように大きな木造屋根を架け、その下には大きなデッキと小さな談話室を配置。デッキはおおらかな円弧を描き、みんなでつくる庭を囲み、周辺の景色を愉しむことができるようなデザインとした。また避難所から応急仮設住宅・恒久住宅を一連のプロセスと捉え、避難所で使用した「紙管間仕切りシステム」の紙管を木漏れ日を演出する天井材としてリユースするなど、コスト削減や記憶の継承にも取り組んだ。」

「みんなでつくる庭」は社会環境工学科の星野裕司研究室に担当してもらい、住民や学生で草花を育てる花壇を、近所の廃瓦を再利用しセルフビルドでつくってもらった。

異質な活動とその意義

現在はKASEIの活動として、御船町東小坂仮設団地の環境改善活動を行っている。定期的に意見交換会を実施し、仮設住宅およびコミュニティスペースに関する意見や要改善事項を聴取し、出来る範囲で改善活動を行っている。また仮設住宅後の生活再建に関する意向なども伺い、今後は住宅再建等に関する相談や意見交換等を継続的に行っていくことにしている(写真4)。KASEIにおける本研究室の活動は他団地の活動と比べて2つの点で異質である。1つは県による仮設団地および「みんなの家」の計画に基づかない独自の計画がベースにあること。もう1つは独自の活動が先行し、後にKASEIの活動として位置づけられたことである。ただこのような変則的かつ異質な活動も意義があるものと考えている。それはこのような大規模災害に対する災害対応のかたちには多様性があって然るべきであり、それに基づく住民の選択肢は色々あつた方がよいと考えるからである。これだけ多様化した現代社会や生活スタイルに応じた復興支援活動のかたちは、今後さらなる多様性や柔軟性が求められていくであろうし、KASEIのような官・学(できれば産も)が連携した場所にて、その開発や実践が行われるべきである。

年間スケジュール

Annual Schedule

年	月	日	KASEI運営活動名	場所	主旨内容
2016	6	2	運営委員会	福岡県	九州大学、九州産業大学、佐賀大学など福岡近郊の大学を中心に運営委員会の発足「九州建築系大学仮設住宅環境向上支援チーム」として初めての会議
		15	運営委員会	福岡県	「KASEI (Kyushu Architecture Student Supporters for Environmental Improvement) 熊本地震・九州建築系学生仮設住宅環境改善プロジェクト」名称誕生
		29	運営委員会	福岡県	運営委員会役員の決定 第1回KASEI実行委員会の企画
	7	6	運営委員会	福岡県	KASEI実行委員会規約や事務局規定、活動資金や情報共有の方法など組織体制の確認
		12	第1回KASEI実行委員会	熊本県	運営委員会で定めた指針をKASEI参加大学で共有し本格的に活動がスタート伊東豊雄氏 KASEI特別顧問就任
		20	運営委員会	福岡県	仮設団地の現状報告、今後の運営方針(学生メンバーの拡大、各研究室担当団地の決定など)の確認
		27	運営委員会	福岡県	FacebookなどのSNSを活用した情報共有方法の確認 今後の活動について(甲佐町、西原村、益城町、宇土市、宇城市で活動がスタート)
	8	3	運営委員会	熊本県	仮設団地の現状報告、活動予定の確認、公開用HP、Facebook、活動日誌などの情報共有関連について
	9	7	運営委員会	福岡県	活動報告開始 公開用HP、Facebook、活動日誌などの情報共有関連について
		14	運営委員会	福岡県	活動報告、第2回KASEI実行委員会の企画
	24	第2回KASEI実行委員会	熊本県	活動が進んでいる団地から活動報告、KASEI全体で情報共有しながら組織体制を確立していく	
	28	運営委員会	福岡県	第2回KASEI実行委員会からの反省 肥後木材との連携確認	
10	12	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 各地で活動が活発化	
	28	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認	
11	11	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第3回KASEI実行委員会の企画	
	25	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第3回KASEI実行委員会の企画	
	12	11	第3回KASEI実行委員会	熊本県	運営関係の審議、意見交換 各団地活動報告、情報共有 今後の活動について確認
2017	1	3	運営委員会	福岡県	第3回実行委員会からの反省 災害公営住宅やpush型のみんなの家について
		10	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第4回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について
	24	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第4回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書、新年度学生の引き継ぎ、大阪からのKASEI参加などについて	
2	12	第4回KASEI実行委員会	熊本県	野老朝雄さん講演 約1年間の活動報告、各自治体との情報共有、意見交換	
	21	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第4回KASEI実行委員会からの反省 関西チームの活動について	
3	14	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第5回KASEI実行委員会の企画 新年度、新体制に向けた話し合い	

メディアスクラップ

Media Scrap

掲載日 掲載紙

掲載面 / 特集ページ / 記事タイトル

- 2016.04.24 熊本日日新聞朝刊
避難所に間仕切り設置 建築家の坂茂さんと学生ら
- 2016.04.25 熊本日日新聞朝刊
県と熊本市、導入前向き 坂茂さん開発の間仕切り
- 2016.07.21 熊本日日新聞朝刊
仮設入居者へ聞き取り
熊本大生らコース、不安など把握 益城町の復興後押し
- 2016.07.26 熊本日日新聞朝刊
仮設団地をより良く 建築学ぶ大学生らが支援
共用家具など製作へ
- 2016.08.07 熊本日日新聞朝刊
緑のカーテン癒やしに 阿蘇市の仮設住宅
菊陽町の団体設置
- 2016.08.10 熊本日日新聞朝刊
明治の商家を復興しよう
熊本市の新町・古町地区 大学生ら建物を実測
- 2016.08.11 熊本日日新聞朝刊
猛暑和らげ快適に 仮設団地に緑のカーテン
- 2016.08.12 熊本日日新聞朝刊
仮設入居者目線のデザインお披露目
甲佐町白旗「みんなの家」
- 2016.09.11 毎日新聞朝刊
棟上げ祝い餅つき 甲佐・白旗仮設団地
- 2016.10.02 熊本日日新聞朝刊
「みんなの家」の設計を考える意見交換会
南阿蘇村の陽ノ丘仮設住宅団地住民
- 2016.10.04 熊本日日新聞朝刊
仮設団地のロゴマーク完成
2020年東京五輪エンブレムの野老さんがデザイン
- 2016.10.04 毎日新聞朝刊
「人」をつなげて輪 仮設団地ロゴ
野老さん基本デザイン
- 2016.10.04 読売新聞朝刊
野老さん監修仮設ロゴ
益城「人のつながり」を表現
- 2016.10.15 熊本日日新聞朝刊
住民の声、復興に生かす
熊本大学が交流拠点「ましきラボ」を19日開設

- 2016.10.17 読売新聞朝刊
「みんなの家」に住民意見
甲佐の仮設団地交流施設が完成
- 2016.10.18 西日本新聞朝刊
熊本の仮設住宅ど「みんなの家」
「次の災害から、ここをスタンダードに」
建築家 伊東豊雄さん
- 2016.10.20 熊本日日新聞朝刊
「町の将来話そう」益城町に交流拠点 熊本大が開設
- 2016.12.19 熊本日日新聞朝刊
「みんなの家」で会食楽しく
南阿蘇村の陽ノ丘仮設住宅団地に完成
- 2017.01.20 熊本日日新聞朝刊
Frontier、先端を走る=避難所に間仕切り設置
県立大環境共生学部居住環境学准教授の
佐藤哲さん(39)
- 2017.03.29 熊本日日新聞朝刊
被災地にアートで温かみ
熊本市現代美術館企画展のイベントで
日比野克彦さんから語り合う
東日本大震災 東北・関東大震災



寄付賛同願

Requests for Donations / Support

九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト

(KASEI: Kyushu Architecture student Supporters for Environmental Improvement project)

賛助会員会費のお願いについて

御中

KASEI 実行委員長 末廣 香織

学生代表 林 孝之



平成28年4月に発生した熊本地震により、熊本県内各地は大きな被害を受けました。

九州内の建築系大学は、5月に「KASEIプロジェクト」を立ち上げ、現在、応急仮設住宅に入居されている方々を支援しています。今後約2年間、熊本県土木部建築課および各市町村と協働し、学生ボランティアを中心として応急仮設住宅の環境向上（仮設住宅内外の設えと質的向上や集会所の運営など）に取り組んでいきます。賛助会員の皆様には、年会費の形で活動にご協力いただくとともに、可能であれば現地での活動にもご参加いただきたく存じます。

本主旨にご理解いただきますとともに、ご協力を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

2016年9月

- 会員 : 団体賛助会員 (活動への参加・支援) 年会費5万円/口 以上
個人賛助会員 (活動への参加・支援) 年会費1万円/口 以上

ご協力頂きました賛助会員 (団体・個人) のみなさまのお名前は最終報告書に記載させていただきます。掲載に不都合がある場合には事務局までご連絡下さい。

- 振込先 : ゆうちょ銀行 KASEI 記号 : 17440 番号 : 81365781
他金融機関からの振込の受取口座として利用する場合は
店名 : 七四八 (読み : ナナヨンハチ) 店番 : 748 普通預金 口座番号 : 8136578

- 連絡先 : 九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト 事務局
〒815-8540 福岡市南区塩原4-9-1 九州大学 芸術工学研究院 田上研究室
TEL : 092-553-4438 FAX: 092-553-4438
e-mail : kasei2016@gmail.com
Facebook : <https://www.facebook.com/kasei2016/>
HP : <http://kasei.kumamoto.jp>

活動助成・賛助会員

Supporters List

Supported by  THE NIPPON FOUNDATION

賛助会員

- ・アーキタンツ一級建築士事務所
- ・(株)あい設計
- ・(株)アイ・トレーディング
- ・旭化成ホームズ(株)
- ・(株)粹設計
- ・伊藤建築都市設計室一級建築士事務所
- ・(株)一原産業
- ・インターメディア一級建築士事務所
- ・エイテツアーキテクト一級建築士事務所
- ・大石和彦建築アトリエ
- ・小竹組
- ・JR九州株式会社
- ・(株)志賀設計
- ・株式会社静建築まちづくり研究所
- ・(株)染野製作所
- ・(株)竹中工務店
- ・(有)田中俊彰設計室
- ・株式会社日本設計
- ・(株)松山建築設計室
- ・(株)ミスターフローリング
- ・(株)ファクダスアーキテクツ
- ・古森弘一建築設計事務所
- ・北海道パーケット工業(株)
- ・(株)無重力計画
- ・(株)室園建設
- ・(株)メイ建築研究所
- ・柳瀬真澄建築設計工房
- ・(株)山下設計
- ・リズムデザイン一級建築士事務所
- ・(有)設計室

(50音順)

メンバー一覧

Member list

実行委員

朝廣和夫 | 九州大学

赤川貴雄 | 北九州市立大学

秋元一秀 | 崇城大学

有馬隆文 | 佐賀大学

安齋哲 | 九州産業大学

岩佐明彦 | 法政大学

井手健一郎 | リズムデザイン

牛島朗 | 山口大学

内田貴久 | 内田貴久建築設計事務所

内田文雄 | 山口大学

大月敏雄 | 東京大学

岡田知子 | 西日本工業大学

桂英昭 | 熊本大学

加藤浩司 | 有明工業高等専門学校

菊地成朋 | 九州大学

城戸崎和佐 | 京都造形芸術大学

黒瀬武史 | 九州大学

後藤隆太郎 | 佐賀大学

西郷正浩 | 崇城大学

佐久間治 | 九州工業大学

佐藤哲 | 熊本県立大学

志賀勉 | 九州大学

四ヶ所高志 | 福岡大学

柴田晃宏 | 鹿児島大学

下田貞幸 | 熊本高等専門学校

末廣香織 | 九州大学

曾我部昌史 | 神奈川大学

高橋浩伸 | 熊本県立大学

鷹野敦 | 鹿児島大学

田北雅裕 | 九州大学

田中智之 | 熊本大学

田中尚人 | 熊本大学

田上健一 | 九州大学

槻橋修 | 神戸大学

辻原万規彦 | 熊本県立大学

デワンカーバート | 北九州市立大学

徳田光弘 | 九州工業大学

富安亮輔 | 東洋大学

中大窪千晶 | 佐賀大学

中園哲也 | 崇城大学

根本修平 | 第一工業大学

朴 光賢 | 鹿児島大学

姫野由香 | 大分大学

平瀬有人 | 佐賀大学

藤原ひとみ | 有明工業高等専門学校

藤田直子 | 九州大学

星野裕司 | 熊本大学

前田茂樹 | 大阪工業大学

正木哲 | 有明工業高等専門学校

益田信也 | 近畿大学

増留麻紀子 | 鹿児島大学

三笠友洋 | 西日本工業大学

宮崎慎也 | 福岡大学

宮本佳明 | 大阪市立大学

安武敦子 | 長崎大学

矢作昌生 | 九州産業大学

横山俊祐 | 大阪市立大学

(50音順)

学生実行委員

有明工業高等専門学校 藤原研究室—————青田興明 | 富増弥希 | 大政風 | 柴田逸希 | 中川智哉 | 吉村花香 | 渡邊大貴

大阪市立大学 宮本研究室—————鍛冶田祥尚 | 川口昂史 | 重光理沙 | 中嶋純一 | 菰口祐美子 | 中林顕斗 | 白松楠

大阪市立大学 横山研究室—————野田裕介 | 土居和樹 | 富永慧 | 海本芳希 | 中野隆太

大阪工業大学 前田研究室—————東野健太 | 林雅大 | 新井悠太 | 隈元峻太

鹿児島大学 柴田研究室—————河崎葉奈子 | 坂本直哉 | 須永達也 | 西垣信良 | 竹島光志郎 | 木村拓 | 穂満亮祐 | 明治強照 | 坂井一隆 | 高尾奈緒 | 坂元利伎 | 上村佳子 | 中尾有希

鹿児島大学 増留研究室—————斎藤雅敏 | 西山知宏 | 森永涼平 | 松田寛敬 | 北之園裕子

鹿児島大学 鷹野研究室—————林田真知 | 畠俊典 | 平川美憂 | 田村健太郎 | 稲留壮親 | 加藤佳輝 | 吉原佳代 | 赤松麻由

九州大学 末廣研究室—————林孝之 | 川谷大輔 | 遠藤由貴 | 谷口和弘 | 鶴田敬祐 | Ester Peralta | 河村悠希 | 大谷芽生

九州大学 菊地研究室—————野口雄太 | 前川遥奈 | 丸山千尋 | 藪井翔太郎 | 片岡美佳 | 沼口悠太

九州大学 田上研究室—————磯上千尋 | 田中精耕 | 野添脩斗 | 河合惠美 | 福田健 | 中原有理 | 遠藤智樹 | 有馬駿 | 山中雄登

九州大学大学院 人間環境学府—————佐土原洋平 | 吉岡大貴 | 春山詩菜

九州工業大学 佐久間研究室—————石橋凌 | 今井智也

九州工業大学 徳田研究室—————木村圭佑 | 大久美保 | 財前貴行 | 前川元貴

九州産業大学 矢作研究室—————久家孝允 | 倉富那美子 | 島田貴博 | 内野友貴 | 川口真愛 | 川野雅規 | 塩真光 | 志賀織晃 | 下津皓平 | 長家徹 | 船越研究室 | 大賀善治 | 上原諒太郎 | 江崎駿 | 小澤成美 | 黒若香帆 | 戸上夏希 | 平安茜音 | 村上優太 | 秦拓也 | 脇隼人 | 松石和也 | 清水史子 | 竹内瑞紀 | 田所佑哉 | 富永航太 | 山口祐 | 山本彩菜

近畿大学 産業理工学部 建築・デザイン学科—————中村直己

熊本大学 田中研究室—————有光史弥 | 林原孝樹 | 吉海雄大 | 大城俊 | 小山遼太 | 福嶋海仁 | ワナズルフア | 和泉秀 | 小川航輝 | 河口ひかり | 古賀壮一朗 | 中村太紀 | 藤田智之 | 吉永優成 | 甲斐悠加 | 川端宏人 | 澤田拓巳 | 福留愛

熊本県立大学 佐藤研究室—————小濱光時 | 宇治野里帆子 | 加越由樹 | 金城正汰 | 津田桂佑 | 鳥越柚子 | 中野未香子 | 山田大貴

熊本県立大学 鄭研究室—————高島遥 | 平山響子

熊本県立大学 環境共生学部居住環境学科—————岩崎夏子 | 岩本航太郎 | 上村丹唯佳 | 内川裕佳 | 浦田将嗣 | 大坪達将 | 甲斐歩美 | 加藤里恵 | 金氏竜哉 | 川嶋梨月 | 児玉誠二郎 | 坂崎麻友 | 城島由紀乃 | 瀬口琴乃 | 大毛詩織 | 高濱杏香 | 谷川奈々 | 田上雄基 | 中村明日香 | 西口昂輝 | 野田歩実 | 久宗秀成 | 福住陽太 | 古庄麗奈 | 藤本功夫 | 本田愛莉 | 松岡妙生 | 松本一輝 | 本井孝汰 | 芳崎大地 | 大家君香 | 川端祐貴 | 小河礼尚 | 嶋村友佑 | 高尾亜嘉利 | 中尾有沙 | 永野晃大 | 米原睦貴 | リュウルレイン

熊本県立大学 総合管理学部総合管理学科—————岩崎貴夏矢 | 伊藤絢香 | 小川藍 | 金澤里奈 | 川原麻由 | 古谷彩乃 | 堺大介 | 里くるみ | 柴田友華 | 島添景子 | 園田卓実 | 竹本雛子 | 立山結 | 豊岡莉佳 | 長島美沙 | 長藤純矢 | 橋本康隆 | 畑扶綺子 | 濱田兼士郎 | 宮内康貴 | 森内貴氏 | 山口裕里香 | 阿部いずみ | 蛭子祐土

熊本高等専門学校 下田研究室—————小嶋晃平 | 井島拓也 | 許斐ももこ | 永野蓮太 | 西田みずき | 藤井祐稀 | 藤掛佑基 | 松田崇志 | 吉村龍 | 蔵原周太郎 | 吉海 光大

佐賀大学 平瀬研究室—————副田和哉 | 荒牧優希 | 内藤沙耶 | 仲浩慶 | 山田章人 | 石井陽菜 | 坂本明文 | 広谷洸多 | 荒木達也 | 西諄子 | 大久保健太 | 池尻真人 | 江崎史浩 | 岳嘉騰 | 中村実咲 | 永山貴規 | 林田大晟 | NUTHAWAT RATTANASUPORNCHAI | JONGSUEBSOOK JAKKRAVUTH | 森山拓弥

佐賀大学 後藤研究室—————プリア スレスタ | バク ジェ ヨブ | 井上尚弥 | 深江大貴

崇城大学 西郷研究室—————赤尾光彦 | 坂本涼太 | 園田彩夏 | 西田直生 | 吉村翔

崇城大学 秋元研究室—————鶴えりな

崇城大学 中園研究室—————立花和弥

長崎大学 安武研究室—————甲斐悠介 | 竹村潤 | 山下素史 | 石本隆之介 | 黒板未来 | 佐々木宏太 | 鶴地宏海 | 丸山一寿

西日本工業大学 岡田研究室—————天野健太郎 | 加藤幸生 | 黒田拓也 | 相良洋孝 | 高野菜穂 | 東幸貴 | 平田くるみ | 吉田成美 | 片山英子 | 鳥袋美鈴 | 津川七海 | 宮吉早紀 | 吉田郁乃 | ラム タン グッド | 有瀬千絵 | 加藤魁人 | 国仲修真 | 是本健太 | 廣門優太

福岡大学 四ヶ所研究室—————元田陵正 | 半田琴美 | 染矢啓太 | 中島大貴 | 星哲郎 | 西野雄太 | 原昌平 | 山根あい | 小田響

山口大学 内田研究室—————桑原建大 | 福井啓晃 | 江口透悟 | 藏園悠介 | 齋藤拓海 | 千三木唯央里 | 西山菜月 | 松永悠 | CHOW YI XING

(50音順)

編集後記

Postscript

林 孝之 Takayuki HAYASHI

2016年度 学生代表
九州大学大学院 人間環境学府 空間システム専攻 修士課程 修了

KASEIの初年度の学生代表をやらせていただきました。私自身の話を致しますと、震災直後に現地に入り物資提供の支援を行っていました。直後の被災地の状況、被災者の生活、錯乱している行政、建物が与える恐怖等を痛感すると共に、個人の力では役に立てない無力感を覚えていました。そんな中、先生方にお声掛けをいただきKASEIの立ち上げ時にご一緒させていただきました。

学生代表として遂行していく中でKASEIから学んだことは多くありますが、その内の一つに「速さ」があります。被災地や被災者の生活状況の変化は著しく、それに伴い支援側も迅速な対応が求められます。KASEIの活動の中でも「みんなの家」の完成式に合わせて家具作成やイベントの企画を行う等、迅速な対応が求められるケースが多々ありました。KASEI自体の発足も同様ですが、プロジェクトや活動においての初動の速さ、仕事の迅速さがこのような有事には特に重要だと身にしみて実感しました。

建築系の学生が震災の支援を行うという活動内容はアーキエイドから引き継がれていますが、KASEIは活動ごとに活動日誌を記入しメンバー内で情報共有を行う等、よりシステムティックな構成を取っています。このように前回の東日本大震災の知見や経験を活かし更新していくことは、次の災害復興活動にもつながると考えています。一方、震災から1年以上経った現在はメディアが取り上げる数も減少し、多くの方の関心は薄れていき、自然災害を他人事として捉えがちになってきているように感じます。私自身も九州から離れた現在の生活からは、想像し難くなってきたのが本音です。日常時での有事に対しての備えや、災害が起きた際の迅速な対応の取り方を今後も検討し続けなければと考えています。

最後になりましたが、KASEIの活動は多くの方々にご賛同ご支援をいただきました。心から感謝申し上げます。また本プロジェクトにご協力頂いた関係者の皆様、各仮設住宅団地の住民の皆様には様々な場面でご指導・ご助言を多くいただき、支援する側の私達が逆に多くのことを学ばせていただきました。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

コミュニケーション能力やデザイン力、周辺環境へのリテラシー等、建築の専門能力が災害復興時に活かされつつある現代において、KASEIの活動が今後必ずどこかで起きる災害時の有用な知見の一つになることを望んでいます。

KASEIプロジェクト 年次報告2016

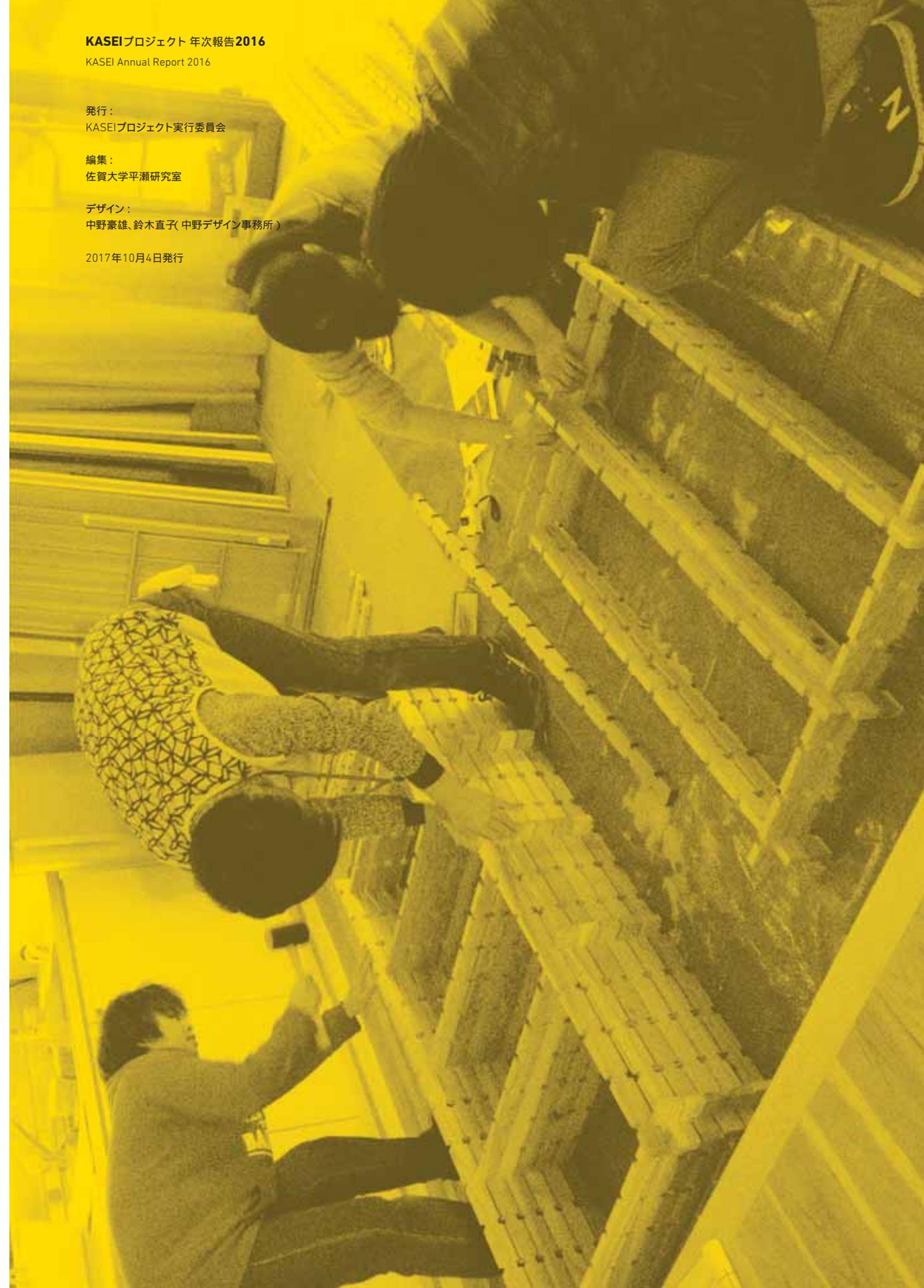
KASEI Annual Report 2016

発行：
KASEIプロジェクト実行委員会

編集：
佐賀大学平瀬研究室

デザイン：
中野豪雄、鈴木直子(中野デザイン事務所)

2017年10月4日発行



Kyushu
Architecture Student
Supporters for
Environmental
Improvement Project

KASEI

